

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|--------------------|---|
| 標題 | 華 |
| Title(English) | ka |
| 発行者 | TIT建築設計教育研究会 |
| Publisher(English) | TIT Society of Architectural Design Education |
| 巻号 / vol. | 019 |
| 発行日 / Pub. date | 2000, 6 |
| 権利情報 / Copyright | 本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。 |

本館1F-東工大出版物

華 : ka

20000000 19

大岡山 20100720 00014802 (2009)



巻頭:住宅デザイン

建築の設計に携わる人にとって、住宅は特別な存在であるかもしれません。

ル・コルビュジェの「住むための機械」が住宅のイメージであると同時に建築そのものの概念を示したように、20世紀は数々の住宅が建築をリードしてきたと言えるでしょう。

つまり建築の概念や意味を問うとき住宅は使える対象であったわけです。

戦後のプロフェッサー・アーキテクトたちは、限られた材料、条件を克服しながら新しい時代にふさわしい住宅の理想像を提案し、

その後、公的な住宅供給システムが充実しハウスメーカーが台頭してくると、それを後目に建築家は住宅をつくることで各自の建築論を展開しました。

今日、住宅をつくる主体が多層化し緻密なノウハウが蓄積される状況にあって、建築家の住宅デザインはどこに根拠を見いだすことができるでしょうか。

最近頻りに語られる都市環境やエコロジーといった問題には、かつての漠然とした観念としての社会や都市とは違った、具体的な環境に住宅を接続させる契機が含まれている気がします。

そこで本号では「住宅デザインの根拠」と題して、箱の家シリーズ、アルミエコハウスなど住宅のプロトタイプを追求するという独自の方法を追求されている建築家の難波和彦氏と、

住宅を数多く設計され、また建築家の言説をひとつの重要な研究テーマとされてきた本学の奥山信一助教授を迎え、

戦後から現代に至る様々な住宅の根拠をめぐるとともに、住宅デザインの展望を議論して頂きました。

華[ka] 2000年 春・夏号

「巻頭記事」対談「住宅デザインの根拠（難波和彦+奥山信一）」

小論：表現としてのエコロジー——NHK教育「若手建築家バトル 理想のエコロジーハウスに挑む」を見て（安森亮雄）／[99年度前学期建築設計製図]／

「ニュース投稿」投稿作品紹介、書評：「ケーススタディハウス」時代の変わり目における理想住宅（那須聖）／世界の建築教育：ミラノ工科大学に留学して（齋藤哲也）

OB卒業設計再見：戦時色の反映と建築形態の3つのタイプ（山崎鯛介）／[INFORMATION]

Headline: Housing Design

対談:住宅デザインの根拠

Housing Factors

難波和彦(非常勤講師・界工作舎)＋奥山信一[助教授]
NAMBA Kazuhiko (Guest Professor, KAI・WORKSHOP),
OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor, Tokyo Institute of Technology)
司会: 寺内美紀子(助手)
TERAUCHI Mikiko (Assistant, Tokyo Institute of Technology)



難波和彦[写真右端]

NAMBA Kazuhiko

1947年 大阪府生まれ

1969年 東京大学工学部建築学科卒業

1975年 東京大学大学院博士課程修了

1977年 一級建築士事務所界工作舎設立

主な作品:竹の友幼稚園、オフィスマシ、EXマシ、あじろI、II、箱の家シリーズ 主な著作:「現代建築の発想」(丸善)、「建築的無意識」(住まいの図書館)、「モダニズム建築の極北-池辺陽試論」(彰国社)

奥山信一[写真中央]

OKUYAMA Shin-ichi

東京工業大学助教授

以下は2000年2月29日[火]に界工作舎にて行われた対談の様を、学生編集委員の長岡大樹(D1)、吉村英幸(D1)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[社会との関係に根拠を求める]

寺内——今回は住宅のデザインの根拠についてお話を聞きたいと考えています。これまで住宅は建築を思考する上で重要な役割を担ってきたと考えられます。戦後の増沢洵、池辺陽らの最小限住居(Fig.1, 2)や工業化の問題には理想やモデルを提示することで一般社会と直接関わろうとした建築家の姿勢が窺えるし、また60年代はじめの篠原一男の「住宅は芸術である」というマニフェストは表現領域として住宅を再定義する試みであり、その後の建築に大きな影響を与えました。これらは全て住宅に終始しながらも、建築をつくる際の根拠をどこに求めるかという思考の軌跡と捉えられます。そこで、お二人には今までの住宅あるいは建築の根拠としてきたところを語って頂き、今後の可能性を探りたいと思います。

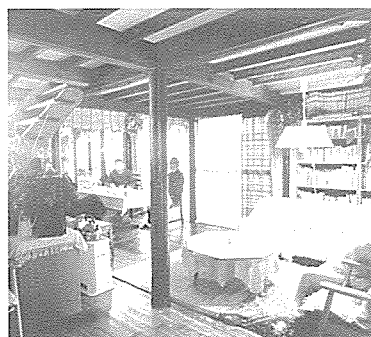


Fig.1 淀川邸(最小限住居の試作:増沢洵自邸(設計:増沢洵,1952年)を昭和40年に移築。柱、建具などのオリジナルを残しながら現在に至る)



Fig.2 立体最小限住居/設計:東京大学池辺陽研究室,1951年(写真提供:難波和彦)

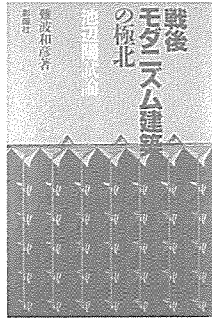


Fig.3 戦後モダニズム建築の極北-池辺陽試論
難波和彦著(彰国社)

奥山——最近の難波さんの活動は現代の建築的状况の中で特異な位置にあると思います。アルミエコハウスしかり箱の家シリーズしかり、個別の解法を求める今の多くの建築家とは違い、標準化したものを追求していくという意味で特異な存在であると思います。そのことと、池辺陽試論(Fig.3)で書かれている内容がどこかでリンクするのではないのでしょうか。例えば、池辺は合理性を追求しながらもその裏側に常に芸術性があったと書かれていますが、池辺の弟子である難波さんにもこのような二面性があるのではないかと、難波さんがこの本で言いたかったことは何なのでしょう。

難波——極めて個人的な理由ですが、池辺研を卒業した人ですら誰も池辺を評価しない状態にあって、何としてでも池辺を世の中に認めてもらいたいという気持ちがありました。池辺は屈折した人で、建築はもちろん、映画、芝居、音楽、科学、何を聞いてもちゃんと答えられる、とてつもなく視野の広い人でした。それが設計の中に出てきて、なかなか収斂しなかった。

奥山——池辺は建築を社会にダイレクトに接続させようとしたけれども、それは成功しなかったわけですね。

難波——そう、成功しなかった。奥山さんの書いている通り(Cf.1)です。自分の世界での一貫性は絶えず追求していたけれど、それが社会にリンクしたかという必ずしもそうでもない。池辺が爆発的に住宅を設計するのは60年代の始め頃に1年間に30戸ぐらい住宅をつくりましたが、その前から自分たちがつくるプロトタイプは、時代のだめさを認識させるものと言っていました。それを再確認したのが磯崎さん達の八田利也(Cf.2)で、池辺はその通りだと思っていたのではないかなあ。

奥山——でも池辺に限らず当時の建築家には、社会的状況を動かす建築をつくるのが建築家の使命なんだという意識が強かったのでは?

難波——それはありましたね。非常に短期ではあったけれど、ジャーナリズムも建築家に期待していたし、少なくとも池辺に住宅を頼む人達は、自分達の生き方の指針を示して欲しいと思っていた。

奥山——そのことが、プロトタイプの追求につながるわけですか。

難波——そうですね。でも、実際のところは、施主はみんな医者とか弁護士といったブルジョアで、大衆でも何でもなかった。それは歴史の皮肉だけど、その図式は現在でもあまり変わっていない。

奥山——変わっていないでしょうね。当時の池辺は、実際のクライアントは富裕階層だったとしても、住宅をつくることで社会のかかりの人に影響力を与えるはずだという理想を持っていたと思います。その後の宮脇壇、東孝光等のスタンスは少し違って、自分達の作った住宅が全ての人の生活を変えるなどあり得ないと自覚し、社会の部分と対応する戦略をとった。結果的にそれ以外の人が彼らの作品に憧れをもつことで、間接的に社会と接続されるというように、回路を2段階に設定したわけです。現代に生きる建築家は2段階どころか、3、4段階なのかもしれないけど、そういう指導理念みたいなものの図式は変わっていないかもしれない。

難波——池辺の頃は、もっとストレートだった。言葉を変えて言うと、どこにも存在しないタイプを想定した。玄関がなくて、和室がなくて、土足住居で、一室空間を主張した人は他にいなかった。その後の宮脇や東は、現実に存在する人たちのライフスタイルを理解し、それに対してリアルにアプローチしていった。

奥山——プチブルという言葉があったように多くの人が少し裕福になったと思うようになってきたのが60年代後半から70年代にかけてで、その辺の階層を宮脇や東はまず開拓したと言える。多くの人がプチブルだと思っているわけだから、結果として社会全体を相手にしたことになる。そのような社会構造の変化に対するずれを池辺自身はどれだけ認識していたのでしょうか。

難波——池辺は理想型を設定するという意味で、非常に観念的に住宅を作っていたから、そんなことはどうでもよいと考えていたと思います。それが池辺が時代から遊離して行った最大の理由でしょう。

寺内——その辺りで建築家像が変わってきたと考えられるのでしょうか。

難波——60年代にハウスメーカーがでてきた。大和ハウスがでてきたのは60年代の前半で、ミサワハウスが60年代半ばです。

奥山——戦後から50年代までは、建築家は国家を背負うぐらいの立場にいる人であり、街の設計事務所の仕事は建築家の仕事とは思われていなかった。その位置付けが60年代の宮脇や東の登場によって、さらに70年代以降のハウスメーカーの台頭によって変わってきたのは事実でしょう。変わってきたことのもうひとつの原因として、社会における建築の生産システムの変化があると思う。池辺には、部品の開発をして、それが建材メーカーを動かしていくという、社会の生産機構まで変えるような建築家の指導理念と実行力があつた。しかしハウスメーカーの成立以降は、社会が供給するものを建築家が使うようになった。こうした状況は、現在ではむしろ当然のことになっている。

難波——そう。池辺が残した資料に、材料をテーマにした20人ぐらいの対談が無数にありました。石膏ボード、ハードボードはどうだとか。とにかく新建材を開発することが一時期集中的に行われて、池辺はそうした機会のすべてに顔を出していたと思いますね。

寺内——そういった状況で、住宅をつくることの固有の意味みたいなものをどういうふうと考えていたのでしょうか。

難波——池辺はコルビュジェの住宅は宮殿であるという言葉信じていた。都市の中で一番変わらない部分が住宅地であると始終言っていた。公共建築は、天才の建築家がヒロイックにつくれれば良いが、住宅はビューロクラティックなつくり方をする必要がある。そのための開発が自分の仕事だと位置付けていたと思いますね。

奥山——住宅は公共建築と違って素朴なディテールを試すことができる。その辺の状況が当時池辺が住宅で突っ走れた原動力だと思う。僕は、建物とか家具に対する一般の人々の感受性がその当時と今とではだいぶ違ってきていると思うのです。以前、東自邸(Fig.4)に行ったとき、この荒っぽいコンクリートは意図ですかと聞いたことがあつ

て、これが当時の普通だと言われた。坂本先生の水無瀬の家でも同様のことを言われました。こうした仕上げの荒々しさは自邸だから許されたわけではなく、多くの人が家具的なレベルも含めてそういうモノに対するおおらかな感受性を許容していた。ところが、建材メーカーが台頭してくると、世の中に小綺麗なものが溢れかえってくる。IDも含めて小綺麗なものでないと完成品とはみなされなくなるという時代に現代はきているのではないのでしょうか。ものの見方が変わってくると、建築家の方もそれを前提とした作り方になってくると思います。



Fig.4 塔の家(東孝光自邸) 設計:東孝光,1966年

難波——僕の記憶で言うと、第1次オイルショックあたりがちょうど変わり目のような気がする。それ以前は、大学院生でも公共建築ができる時代だったけど、それ以後は違ってきていますね。

寺内——戦後の復興期に登場した建築家は、新しい住宅像を提案することで社会に貢献したり、生産機構にまで関わる指導者的な役割を担っていたりと、住宅をつくることの根拠を社会状況との連動のなかに直接的に求めていたということですね。また、建築と社会全体との理想的な対応関係は幻想だったと自覚できたとしても、建築家の指導ないしは啓蒙の構図は現代にも続いていると考えられるのですね。

Cf.1 「住宅の黄金時代と低迷時代」(奥山信一/建築ジャーナル、APR.1995 No.862)

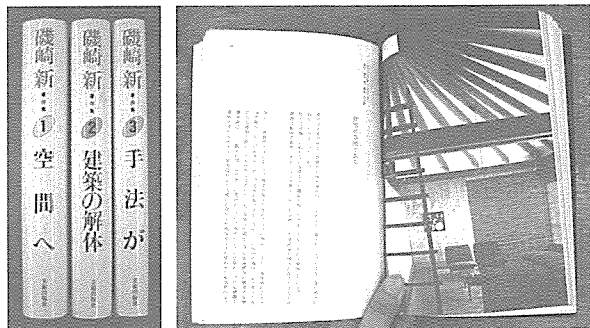
Cf.2 「小住宅設計ばんざい」(八田利也/建築文化1958.4)

[言説空間の誕生——篠原一男×磯崎新]

寺内——次に、建築をつくる上で言説活動を戦略的に行った篠原一男と磯崎新についてお話を伺いたいと思います。例えば、篠原は清家研究室に所属していたわけですが両者の関係をどのように考えますか。

難波——篠原は清家清のある部分を極端に突き詰めた人だと思います。篠原が出現したことから逆にたどると、清家は篠原的なところを持っていたけど、時代の流れとして社会にも目を向けなければみないところがあつた。そのために清家の主張が薄まった面もあつたと思う。当時のプロフェッサーアーキテクトの中では、清家は一匹狼的な存在で基本的には群れなかった人だと思う。それは新建築事件で証明されている。村野藤吾の読売ビルを編集部が批判して、編集部の人が皆やめて池辺をはじめとして丹下健三や吉阪隆正や武基雄も降りたのに、そのあとに清家が入って、結局、清家が再建したみたいな形になった。そういう全く群れないというやり方を、つきつめた人が篠原だと思う。

奥山——僕は、言説空間というものを建築空間と対等なものとして誕生させた建築家として篠原一男と磯崎新を捉えたいと思います(Fig.5,6)。それ以前の丹下や池辺はたくさん論文を書いてますが、それは言説活動であつて、言説空間ではなかつた。例えば、磯崎は住宅をつくる際に都市住宅であつてもビッツァというフィクションを重ねるわけですが、それは言説空間という虚構の世界だから許される。



右：Fig.5 空間へ、建築の解体、手法が 磯崎新著（美術出版社）

左：Fig.6 住宅論 篠原一男著（鹿島出版会）

難波——同じ頃、書くことで出てくるベンチャー等との連動があるよね。それが批評の始まりです。批評という問題と言説空間の自立とは連動しています。池辺の時代には批評なんてなかった。ポジティブでフィクションのないリアルな世界だった。

寺内——篠原や磯崎の言説は、具体的な批評の対象を表すのではなく、あくまでも自分の作品を主張するためのフィクションであると思います。とすれば、逆説的にどのような批評が読みとれるのでしょうか。

奥山——磯崎は丹下研究室という国家を徹頭徹尾背負っていた研究室で修行しましたから、そこからの脱却という面があったのではないのでしょうか。篠原に関しては、もともと社会に擦り寄る必要はないという主張ではないか。つまり、社会に対する指導理念など要らなくて、自分の表現に興味のある人がいるならば向こうから近づいてくれば良いというスタンスです。それを理解してもらうための建築と言説空間であると。建築にはもともとそういうストーリーテラー的側面があるのではないかという提案が批評と言えるのかもしれない。

難波——だから篠原も意識していたと思うけど、それまでの建築家の果たす社会的な役割と言われていたもの——自分達がそう思っただけで、実際は乖離していたのかもしれないけれど——に対して、建築家はそういう役割ではないと意識しはじめた最初の世代だと思う。平たく言うと、アーティストとしての建築家だって社会的な役割だと。アーティストとしての建築家は一般化しないし、普遍化もしないし、社会的な発言もしないけれど、少なくともその裏返しではある。今からみれば、社会との距離の取り方を明確にした2人の建築家だと思います。

寺内——批評を裏側にもっていたとしてもそのこと自体を語るのではなく、あくまでもフィクションまで含めた言説の可能性を最大限に利用したわけですね。とすると、それぞれの建築家が個人として内的に抱えていた問題を根拠に建築をつくったと言えるのでしょうか。例えば、難波さんは大学院のころから設計を始められて、自分の方法を考えるというときに、篠原や磯崎のスタンスに対して、いかがお考えでしたか。

難波——僕は磯崎に影響された方です。篠原の書くものには私小説的な文学性というか、独我論的なモノローグ性を感じて、僕は苦手でした。磯崎は絶対にモノローグ的には語らないのでそっちにひっぱられていった。

奥山——僕は磯崎さんもモノローグだと思うのです。ただ公共建築（Fig.7）を相手にするから、その語り方が、公共という世界を射程におかなければならないので、モノローグの中に対立項が入り込んでくるのですね。特に手法について語り始めたときは、ものの作り方になるので、モノローグだと思うのです。ただ、常に公共建築を相手にしていたので、篠原のモノローグとは違って見えたんじゃないですか。

難波——でも手法というのは、そもそもアンチ・モノローグじゃないの。フォルマリズムだから、自分の内的な尺度で計らないで、徹底してシステムを外在化させ、それをひとり歩きさせるわけだから。

奥山——ただ、方法論としては自己完結するし初期条件も与えますよね。初期条件の与え方がモノローグ的だと思います。なぜ、正方形やポルトにするかは説明がつかないわけだし。

難波——でも、あらゆる方法がそうですね。僕は、初期条件の根拠をを説明する必要はないと思います。初期条件は結果からさかのぼって説明されるしかないという建築家の設計の方法を明瞭に露呈させたという意味で、全然モノローグではないと思いますよ。

奥山——結果的にモノローグではないのかなあ。

難波——磯崎を弁護するつもりはないんだけど。磯崎のそういうところは、モノローグというよりむしろ日本的な主体の消去というべきです。一見主体性がないようにみせながら、何か自明の運動があるかのようにみせるやり方がね。篠原が主体を自己完結させようとしたのに対し、磯崎は徹底して主体を消そうとした。どちらも主体にとらわれていたという意味でなら、モノローグといってもいいけど。

奥山——70年代の磯崎の建築を見ていて、ものすごいパワーが誌面からも伝わるし、言説もよく分かる。正方形を積み重ねたり、ポルトを反復させたりすることで何故公共建築ができるのだろうか、それを手法という自己完結した言葉を語ることで何故できるのだろうかと思った。そういう視点から磯崎さんの建築を観察すると、プランニングが結構オーソドックスで、計画的にみると使いやすいと思わせるプランをつくっていることがわかるのです。そういう二枚舌的なところがダイアローグ性を持ったモノローグだと思う。住宅の場合は、個人の施主がOKすれば、ゴーがかかるから、そんな二枚舌をつかわなくてもいい。公共建築の場合は、それを使わざるを得ない。磯崎の最もうまかったのはそこだと思っているのだけど。

難波——計画的には非常に健康で、表現は非常にラディカルということでしょう。

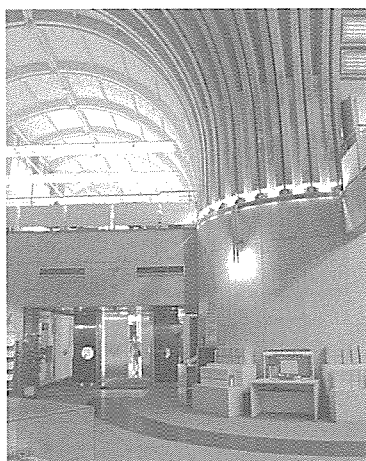


Fig.7 北九州市立図書館/設計：磯崎新アトリエ+環境計画、1975年

奥山——しかし、言説空間を築いた人たちが生み出した状況には弊害もあって、その後ストレートに建築をつくることではもはや勝負できなくなるといふ鬱屈した状況も生じさせたわけです。そんな中で伊東豊雄のシルバーハットは、僕が学部4年生の頃でしたが、ものすごく鮮烈で、こんなので建築はいいのかなと素朴に思った。それが、言説空間を前提とした建築の世界を軽くしてくれた。空間のイメージとして軽い建築とあの建物は言われているけど、当時の建築的状況自体も軽くしてくれた。この軽さが何なのか、現代につながっている問題だと思う。

【建築家のストラテジー】

奥山——50年代、60年代に建築を勉強していた人達は、勉強してい

ることがそのまま思想的にも技術的にも社会へ直結していたと思う。今は、直結していく部分もあるし、無い部分もある。そのことを、学生たちは分かってないといけないかもしれない。もしかしたら、外国ではどうだったか解らないけど、日本の場合は60年代までは、建築家が社会から自立した存在として成立していなかった可能性がある。だから国家の代弁者であったり、たまたまスターとして持ち上げられたりすることがあったのでは。

難波——建築家がそれまでは、個人じゃなかったと思う。もともと建築家って、個人的な職能じゃなくて必ず相手がいるわけで、それにも拘わらず、モノログができるという強さと内容を持たないといけないということでしょう。相手を説得するわけですが、何か別のところから持ってきた論理で説得するのではなくて、自らの内的な論理を根拠に説得することができれば、それは、個人として自分の世界を持つわけですから、そこから、社会に出ていくという図式じゃないかと。歴史的には60年代終わりの文化革命があり、大学紛争を経て、それぞれが自己へ沈潜し、そこから外へ出ていくための内的な根拠をつかった。その分岐点に、篠原や磯崎がいるわけですが、それは世界的にも同じだと思いますよ。

寺内——建築家の定義は時代に伴っていろいろあるわけですね。建築をつくるに際の根拠が個別化し多様化してきた感じがします。内的な根拠をどれだけ説明可能なものに昇華させられるかが問題だという気がします。

難波——今みたいに戦後からずっと話している話を、若い建築家なり、学生達が認識しないとダメだね。何か自分でやってるつもりでも、意外と昔と同じパターンを踏んでいたりするから、どういう方法をとるにしても、かなり戦略的にやらないといけない。社会の主流との距離の取り方みたいなものは、過去の歴史のなかに一通りの答えがあると思う。そこからスタートしないと戦略は成立しない。

[スタンダードという戦略]

難波——僕はハウスメーカーを基本的には否定しません。例えばミサワホームが今やろうとしていることは時代の要請をとらえていると思うし、僕の考えを先取りしたところもあるからです。もちろん、できたものを評価するかどうかは別ですが。

奥山——スタンダードをどう考えるかってことですね。と、するとそれが池辺陽が考えていたスタンダード、あるいはカスタマイズの世界と、難波さんの現在のスタンスとはやっぱりどこか共振しながら違うところもあるのでは。

難波——共振しつつ違う。まず、僕が想定しているユーザーは資金の面で限定されている。その点、池辺はもっと広い範囲を想定しながら、しかもその全ての人間がプロレタリアになっていくという発想です。僕はそうした階級のばらつきが、ひとまとまりになるとは思わないし、バラバラのなかの都会に住むある階層、本当に一部の狭い階層のためのプロトタイプをつくっているだけです。

奥山——プランニングに関してどうですか？ 社会的な状況を一番反映するのがプランニングでそれは家族を反映すると思うのです。そして住宅が力を持つときには、常にそうした状況をとらえたプランニングを伴っていました。しかし現在は、プランニングとか家族というのが、一枚岩では捉えられなくなってきている。一枚岩の時は、それとは違うものを提示して、ある種のリアリティをもてれば力になるということがあるけれども、現在はかなり多様化している。極端な話、清家自邸とか東自邸でトイレに扉が無いと、それだけでかなりショッキングな出来事だったのですが、今はトイレに扉なんかなくなつて、それくらいじゃ

驚かないぞという時代になりました。かなり個別な身体で多くの人が環境と対応している。そのときにプランニングというものがスタンダード、あるいはカスタマイズできるのかどうか？

難波——ただ、自立した人間についてならそう言っても、小さな子供とか、年寄りはどう思う。彼らは自立した空間を持っていないから周囲の空間に直接的な影響を受ける。だから、空間から影響を受ける身体のためのプランというのは依然としてあり得ると思う。しかもそれは、時間をかければ家族にまで大きな影響を及ぼす条件だと思う。確かに個人が本当に自立してしまえばフィジカルな壁はいらなくて、大きな一室空間でも生活できるという面もある。僕はその両面を前提において初期条件としてのプランを考えているわけです。

奥山——時間限定のある種の啓蒙かも知れませんが。

寺内——もう一つどんな場所に住むかという環境の問題も、住宅の根拠に関わってくると思うのですが、難波さんの箱の家シリーズ (Fig.8,9) の意識的な開放性とも言うべき、場所に対する考え方はどうですか。

難波——家族の中で壁がないことと、近所の人との壁がないというのはスケールが違うだけで、連続的に考えています。成熟した共同体であれば、お互い知らん顔できるであろうという、前提で——全然そうじゃないんだけど現実には——敢えて開いているのです。閉じたら、それは完全に無関係になってしまうから、カーテンで、という意識です。だから家族の問題も、近所の問題も連続してて、できることならそれが集合してくるといいなという……。

奥山——難波さんのスタンダードは時間限定ですが、住宅の全ての範囲まで及んでいく思想だと思います。その延長上にある「箱」が集合して欲しいという考えの背景には、パッケージされた外観あるいは外部をもはや建築家が作れなくなる可能性があるという状況が示されているような感じがするのです。松村秀一さんの論文 (Cf.3) では「部品」と「街」が対比的に直結されていました。大野勝彦さんたちとの座談会 (Cf.4) で、世の中の建物が個性性でできている時代はもうあり得ないと、建物のパーツは全て完全に産業が作り出していて、建築家はそれのアレンジメントをしていると、そのことに意識的でないならば、建築家は都市を語る資格がないと主張されて、僕はそれがすごくよく分かるのです。難波さんの「箱」というつくり方が、今お話ししたことの一面を示している気がして、そこにすごく興味があるんです。

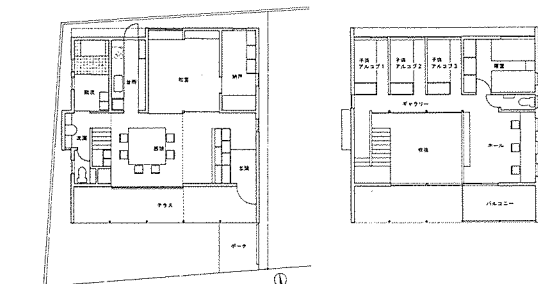


Fig.8 箱の家-1 平面図 / 設計：難波和彦+界工作舎1995年

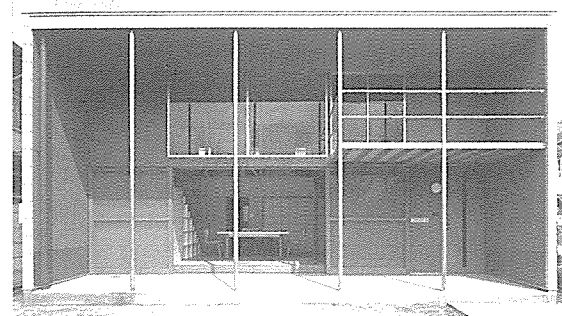


Fig.9 箱の家-1 外観

難波——それは建築家のデストピアということですか？

奥山——ある程度、外部を放棄をするつくり方があり得るかも知れなくて、住宅の場合はスケールが小さいのでそのことが、建築のあり方をドラスティックに変えます。その現れ方として「箱」のシリーズをみることもできるのではないのでしょうか。

難波——放棄というよりは、隣にも同じのがあって並んでるという状態を想定している。その点を塚本由晴さんは敷地や住居の固有性を無視していると批判するけど、原型がそのまま存在することの方がずっと固有性があるし、周囲の乱雑な街並みに対して批評的だと思う。塚本さんの批判は、僕の言説にとらわれすぎているのです。実際の箱の家は既存の環境条件に十分に対応しています。

奥山——それは、社会改革派としての表の顔で言われたことだと思いますが、建築の作り方の論理としては、パーツとしての住宅だと思います。住宅をひとつの完結したものだと、難波さんは考えていないということだと思います。

Cf.3 松村秀一さんの論文：新世紀住宅論3、構法と住宅——「住宅」という考え方を越えて(新建築住宅特集2000年2月号)

Cf.4 座談会(大野勝彦、岩澤晴彦、小見康夫、高山和子、只野康夫、松村秀一)：「不自由な住宅部品」「自由な住宅部品」(建築知識2000年2月号)、「性能時代の」住宅部品(同2000年3月号)

【エコロジー/アルミエコハウス】

寺内——難波さんのアルミエコハウス(Fig.10,11)の話を伺いたいのですが、今までの箱の家シリーズとの違いはありますか。さきほど「時間限定の啓蒙」と奥山さんがおっしゃったけど、家族や人間にべったりとは付き合わない軽いモノであるということなのでしょうかね？

難波——物理的にも軽くて、時間的にも軽いものであるということでしょうね。とくにリサイクルの条件が大きい。

奥山——特定の家族を想定したプランニングであったり、プランニングで強制したり、そういうことが難波さんの建築の中には希薄だと思うから、住まい手が不在のアルミエコハウスでは、それが徹底して見えるのだと思う。

難波——設計のやり方として、やってみたい原型が何種類かあって、在来木造と鉄骨造と集成材造とアルミ造という風にカタログ化しておくわけです。実際の設計では、家族や敷地にあわせていくけれども、アルミエコハウスの場合はそれが無いから、モディファイしてない分、極度に図式的なプランになっただけで、僕にとっては箱の家もアルミエコハウスも程度問題だいう意識しかないです。では、なぜそういう原型をもつことになったのかというと、クライアントの問題とか、外在的なことによる偶然もあるんだけど、箱の家Ⅰが、突然変異として出てきたわけで、自分でもよく分からない。

奥山——現代は、生活像や家族像が多様化して一枚岩ではないから、その対立項として批評的に新しい住空間の提示をするといったスタンスはあり得ない時代になっています。けれども、多様化し細分化した社会構造のうちのひとつを、箱の家というかたちで難波さんは明確につかんでいるのだと思うのです。そこが、最も難波さんの特異なところではないかと。しかし、あまりにも多様化がすすむとどうなるか。ホワイトノイズというか、多様な状況が飽和点に達した時に、もう一回均質化される世界が想定可能だと思うのです。その時、異物の方が対立項になることがあるから、もう一回強い空間がでてくる可能性もあるわけです。

難波——歴史はちゃんと見据えておきたいけど、それを全部引き受けるということは難しい分、少なくとも、自分として意識していきたいと思う

ことは、例えばハウスメーカーですね。彼らのやることを良く見て、時々反撃したいと思う。実際のハウスメーカーの設計部の人達に対しても発言したい。住宅を作る根拠や、社会的な意味は、誰がつくるのかによって、つまり建築家なのか、ハウスメーカーなのか、ディベロッパーなのか、で全然違う。そのスタンスが池辺や僕は他の建築家と異なるのでしょう。僕や池辺の基本的なスタンスは、時代の大きな潮流があるとして、それに対峙して批判するのではなく、逆にその方向を徹底して突き詰めたらどうなるかという可能性を探りたいということです。例えばエコロジーハウスという番組(Cf.5)がありましたね。おもしろいと思ったのは、参加していた建築家たちがみんな肩肘張らずに取組んでいたけど、エコロジーと言っても木とか、自然材料という発想は絶対にとらなかつた。いくら肩の力が抜けていてもそれだけはやらないぞみたいな自己規制が暗黙にある。だからスタンスとしては肩肘張っていないけど、やはり批評的なんですよ。でも、もしその立場に無自覚だとしたら、木はいいねエコロジーだねという審査員の女性の人と比べて、木に対する態度が逆向きなだけで、認識のレベルは同じだと思う。むしろ僕は、木って本当にエコロジーなのかということを深く探求することで、紋切り型にならない木のエコロジカルな使い方を考えてみたいということです。

奥山——断片としての社会と、どこまで付きあうことができるかということですね。今度、設計製図第三で非常勤講師として来て頂くので、断片としての社会とのつきあい方というのを学生に是非教えて頂きたいと思います。

寺内——今日は、住宅デザインの根拠として、社会という漠然とした範囲であったり、個人の表現領域であったり、それらの変遷をお話頂きました。いずれにせよ根拠を問うとき、建築には何か約束された基盤があるのだと考えるのか、社会との接点を自発的に発見すると考えるのか、難波さんのスタンダードやエコロジーを追求しようというお話を伺うと、後者の方に現代の可能性を感じます。

難波——課題はね、エコロジーハウスにしようかと思って、塚本さんたちと同じ敷地を使って、ビデオを見て僕のアルミエコハウスも見せて、もしできたら伊東さんを講評に呼ぶといい。僕も間接的には、ストレートなエコロジーって何だみたいな話も恥ずかしそうにできるし……(笑)。

Cf.5 NHK教育「若手建築家バトル 理想のエコロジーハウスに挑む」(1999.11.6) 詳細は次頁。



Fig.10 アルミエコハウス外観。設計：難波和彦+界工作舎、2000年

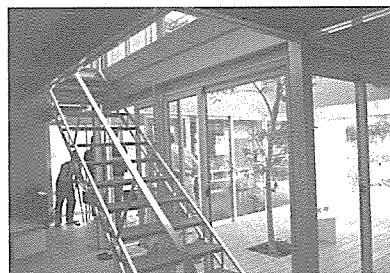


Fig.11 アルミエコハウス内部より中庭を望む

表現としてのエコロジー

NHK教育「若手建築家バトル 理想のエコロジーハウスに挑む」を見て

Eco-Expressionism

安森亮雄 [博士課程]

YASUMORI Akio (Doctoral candidate)

先日「理想のエコロジーハウスに挑む」と題された番組(Cf.)が放映された。エコロジーはもともと生物学の用語であるようだが、現在ではポディショップのような自然に優しい商品からISO 14000まで、自然との調和を図る動き全般を指すものとなっている。そんな状況を反映してか、最近「エコロジー建築」と称される建築も多く登場し、ひとつのビルディングタイプを形成している感すらある。建築はエコロジーという文脈にいかにか接続されるのであろうか。

[エコロジー建築]

番組は3組の建築家(塚本由晴+貝島桃代、遠藤秀平、みかんぐみ)によるコンペ形式によって行われ、制作過程や実際の事例を通して、審査員(伊東豊雄、池内了/宇宙物理学者、宮迫千鶴/画家・エッセイスト)の講評に至るまでが紹介された。番組冒頭では審査員から今回の提案への期待が語られ、自宅を建て替えた池内は次のように述べている。

「伝統的なワザ、日本の大工さん達が開拓してきたワザと、それから無論、近代的なね、色々ないいものがありますから、それがいかにか結び合わされるかという、そのあたりを僕は楽しみにしてるんですけどね。」

ここでは太陽光発電や自然素材を用いた住宅に暮らす自身の経験を重ねつつ、伝統的な工法などのテクノロジーの水準において建築がエコロジーに接続されている。これは建築が元来、採光や換気といった環境制御に関するテクノロジーとしての側面をもつことを考えれば、正しくエコロジカルな建築のあり方と言えるかもしれない。しかしその背景にはややナイーブな自然回帰や伝統回帰が見て取れる。これは東京から伊

豆高原へ引越した審査員の宮迫が「ナチュラルな意味で自然への愛情」と述べたことに象徴されるように、自然や伝統に何か本質的な正しさを見いだす価値観に支えられていると言えよう。2人の発言からのみ判断するのは早急かもしれないが、「エコロジー建築」とは建築のテクノロジーとしての水準に、ある種の本質的な価値観が重ね合わされることで社会的に形成されたビルディングタイプと言えないだろうか。

[メタファーとしてのエコロジー]

3組の建築家たちはこのようなエコロジー建築からはひとまず距離を取ろうとしたようだ。そこでは生態系という言葉に代表されるように、エコロジーをひとつのシステムとして抽象化し、いわば関係のメタファーとして建築のコトバに翻訳することが試みられたように思える。

塚本+貝島は垣根や庭木を取り込んだ「ガーデンルーム」を螺旋状の内部空間の連続のなかに位置づけ、郊外の住宅における建物と庭の組合せという空間の階層的な配列を組み替えることにより、建築をそれが建つ環境との空間的な関係において捉えた。また遠藤は、家族間のコミュニケーションをひとつの生態系に見立てた「精神的なエコロジー」と捉え、コルゲートパネルの連続的な架構による内部空間によって家族の関係をフレキシブルに位置づけることを試みた。これらの提案はいわば空間配列という建築のコトバによってエコロジーを捉え直したものと言える。これに対してみかんぐみは、「みんなでエコハウス」というテーマのもとに、地上階のキッチンや畑を近所に開放して2階を居室とする提案により、建築を住宅地のコミュニティという社会環境の関係において位置づけたと言える。これらの提案においてテクノロジーの水準は、遠藤のコルゲートパネル内部の水循環システムや、みかんぐみのペットボトルのリサイクル素材などの提案がなされたものの、むしろ関係としてのエコロジーをサポートする役割を果たしていたようだ。

しかし、エコロジーを関係のメタファーとするだけではこれらの提案を説明するにはまだ物足りない気がする。塚本+貝島とみかんぐみの提案

では、このような関係のメタファーは建築単体を越えて住宅地やコミュニティといった建築を取り巻く環境を捉えるものであった。ここで技術用語としてのエコロジーが、生物を個体間や生存環境との相互依存性において捉える学を指すことを思い起こせば、彼らは建築の相互依存の相手を構想することで、建築の全体性を捉え直そうとしたと考えられるだろう。これは裏をかえせば、建築のコトバによってエコロジーという概念が再定義されたとも言えよう。

[建築と社会の接続ポイント]

番組は審査員の講評で締めくくられたが、このような建築のコトバによるエコロジーはほとんど理解されなかったようだ。これは今回のテーマに限ったことというよりは、建築の表現が社会に対してアカウントビリティ(説明責任)を必ずしも発揮していないという事実が、エコロジーという社会的な文脈を取ったことで逆照射されたようにも思える。審査員の1人であった伊東豊雄が建築家としての立場から、「地球という全体のシステムの中に連続させていくことが、まだなかなかうまくスムーズに結ばれない」と内省的に述べたことは、このような状況をトレースするものであった。これは社会がかつてのように明確な像をもって描けないことに起因すると思われるが、そのような状況において表現としての建築は社会にいかにか接続されるのだろうか。それはやはり建築の全体性を問うことを通じて建築のコトバで社会の断面を批評的に切り取ってみせること、それを先鋭化させていくことだろう。しかしひとつの疑問も湧いていく。2人の審査員が番組で示した素朴なエコロジーは無視できるものなのだろうか。それを正面から引き受けることによってなお、表現としての批評力をもって建築を社会に接続しえただろうか。エコロジーは現代における建築と社会との接続ポイントとして、建築の社会的な位置を検証する機会を提示しているように思う。

Cf. NHK教育カルチャースペシャル「若手建築家バトル 理想のエコロジーハウスに挑む」1999年11月6日放映



塚本由晴+貝島桃代による提案



遠藤秀平による提案



みかんぐみ(加茂紀和子、熊倉洋介、曾我部昌史、竹内昌義、マニエール・タルディツ)による提案

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科1999年度前学期の「建築設計製図第一」(2年生対象)、「建築設計製図第三」(3年生対象)の学生作品と、その講評会の模様です。

「建築設計製図第一」では、建築の設計や製図の基本的な修練を目的としており、トレース課題と設計課題を組み合わせて行っています。本年度は、第1課題が「最小限住居」、第2課題が「都市部の住宅」でした。

建築空間の総合的な理解を深めることを目的とした前学期の「建築設計製図第二」に続く「建築設計製図第三」では、建築家として活躍されている方々を講師として迎え、専任教官と共に課題を進めております。本年度は、第1課題が「博物館」、第2課題が「大空間建築」でした。

なお、建築設計製図第一・第三ともに講評会は授業担当者全員が参加しております。

(担当者の所属等は授業担当時のものです。)

「最小限住居」

"Minimal House"

担当:

八木幸二[教授] 藤岡洋保[教授] 宮本文人[助教授]

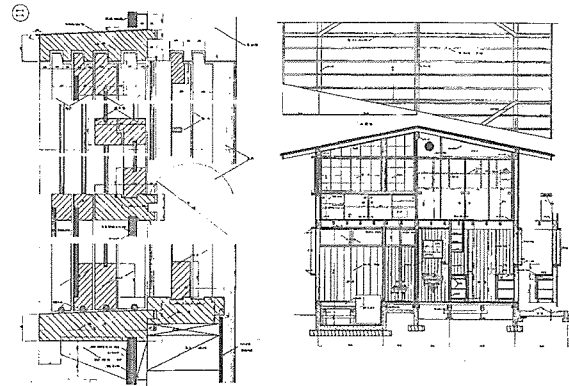
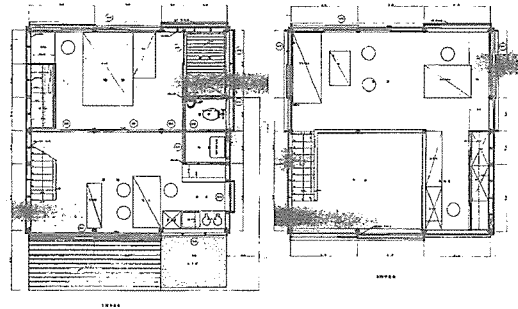
YAGI Koji (Professor), FUJIOKA Hiroyasu (Professor), MIYAMOTO Fumihito (Associate Professor)

奥山信一[助教授] 塚本由晴[講師] 那須聖[助手]

OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer), NASU Satoshi (Assistant)

1—トレース課題:最小限住居「増沢洵自邸」

その1. 平面図、立面図を1/20の縮尺でA1ケント紙1枚に表現する。
その2. 矩計図を1/20、詳細図を1/1の縮尺でA1ケント紙1枚に表現する。(※この課題は、増沢建築設計事務所から提供して頂いた原図をもとに、そのトレースを求めたものである)



平面図(上)および矩計図・詳細図(下)のトレース:倉林貴彦

2—設計課題:「木造小空間の設計」

"Designing a Small Wooden Space"

最小限住居「増沢洵自邸」のトレース課題を踏まえて、自分のための木造小空間を設計して欲しい。敷地は特に限定しない。大草原や森の中の「セカンドハウス」、大邸宅の庭に置かれた「離れ」、農園で週末を過ごすためのキャビンなど、各自が想定して欲しい。基本的に一室空間(ワンルーム)とし、そこを自分のための特徴のある空間として欲しい。たとえば、仕事をするスペース、ベットと遊ぶスペース、酒を飲むスペース、本を読むスペース、音楽を聴くスペース、など……。初めての設計課題なので、造形的な側面よりも、水廻り・家具・開口部などの基本的なスケールをよく考えて設計して欲しい。

[設計条件]

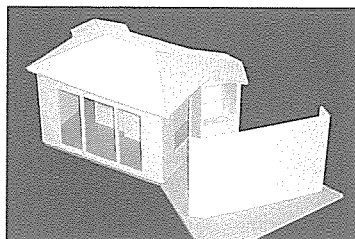
規模: 30m²以内、平屋建て(一部ロフトは可とする)/構造: 木造在来構法/柱: 105×105, 間柱: 105×105/2, 柱モジュール: 910mmを基本とする/設備: キッチン、トイレなどの最低限の設備は設ける

[提出物]

図面: A1一枚に、平面詳細図1/20を中心に、その他必要と思われる図面・スケッチを納める(自分のための空間がわかるような家具等の表記は必ずすること)/模型: 1/20で作製。内部空間、開口部などもできるだけ作り込んで欲しい

以下は1999年5月31日[月]に行われた講評会を学生編集委員の細川いずみ(M2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

片柳 泰志 KATAYANAGI Takashi



片柳——映画が見られる家で、できるだけ大画面で映画を見るために映写する壁を外にした。室内を壁で仕切ると閉鎖的になるので、真ん中に水廻りを配置して、突出した空間と大きな空間を連続させた。

塚本——屋根の架け方によって、突出した部分が別物ではなく、ひとつの場所が延びてきたものにしたという意図がよく分かる。

藤岡——空間のヒエラルキーとも対応している。ただ、面積の制約がネガティブに利いている。自分がやりたい空間を実現するために何をすべきかを再検討してみる必要がある。

倉林 貴彦 KURABAYASHI Takahiko

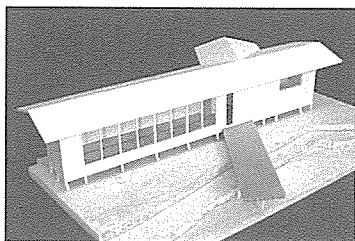


倉林——海が見渡せる開いた空間としてのテラスと、屋上にある林の木々に囲まれた閉じた空間としてのテラスをあわせもつ。室内では居間の部分においてキッチンへの視線を本棚によって遮っている。

藤岡——「ここに座って海を眺める感じがいい」とか「ここで本を読みたい」と思わせるような強いものが欲しい。品良くものをつくることができるが、空間に対するイメージが希薄なのではないか。

奥山——エスキースの初期から最終形のイメージが出ていましたが、それを具体化する段階で魅力的になったところと、イメージが希薄になったところがある。

津守 俊輔 TSUMORI Shunsuke

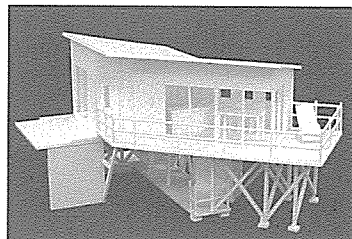


津守——釣りをする空間。室内の幅は釣竿を伸ばして手入れができる大きさで決めた。交差部の角度は窓から釣りをしている様子が見えやすいように考え、導入部からつながっているように延ばした。

藤岡——幅が狭いの片流れでなく切妻屋根にしたのはなぜか。

塚本——立地的にも開口の開け方も陸を背にして海を向いているのだから、屋根についてもそういう方向性を考慮できるのではないか。内部は逃げ場のない感じだが、ランドスケープの中で詩的な存在として、このような幅が狭く長い建築があるのはいい。

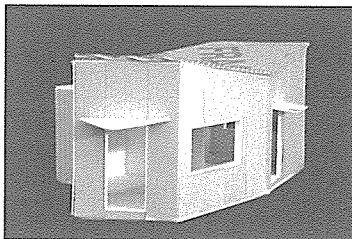
日引 洋平 HIBIKI Yohei



日引——週末に釣りに行くためのセカンドハウス。船でこの家に漕ぎ着けて、階段で上の階にあがると海に対して空間が広がる。船屋という漁師の家を、創造的な楽しい空間にアレンジしたものです。

藤岡——船で下からアプローチするのは、アイデアとしてはあると思うが、そのことで何が生じるかをもう少し考えるべきだ。たとえば、普通の家だと玄関と同じレベルに部屋があるので玄関が閉じた空間になるが、これだとそうではなく開放的にできるとか。プランニングの自由度・可能性がもっとあったはずだ。

玉井 洋一 TAMAI Youichi



玉井——代官山の広い空き地に建ち、自分が街を散策したときの中継地点として様々な研究をする場所である。形に意味はない。ホームレスの人が自分のスペースを確保して住んでいるようなものをつくろうとした。

塚本——ホームレスの人たちは、建築の技術とは全く別の次元で生きるための殻をつくっている。でもあなたはやはり形に関心があるように見え、家具の配置とかが適当で、自分の体がそこにどう関わらせるかが考えられていないように思える。建築の技術というもので生きるための空間をどうつくるかを考えていかないと、根本的な批評にはならない。

【総評】

藤岡——「人が何と言おうとも自分はこれをやりたい」という、何かにこだわりをもつ気持ちを大事にして欲しい。そのことをプレゼンテーションで示してくれると、先生方もいろいろなサジェスションができる。その辺りのことを是非勉強しておいてもらいたい。

奥山——どんな小さな規模の空間でも、建築的なテーマを持ち込めるはずだ。それは新しい建築空間に関わる問題というくらいの曖昧な言い方しかできないが、それを探っていくと、それが伝わるような図面を描いて欲しい。

塚本——この課題のような小さい建物では、過去に繰り返されてきたフォーマットを一度外して、そこで人が関わるあらゆるものが建築を現実化するために利用可能であるという方向で進めていって欲しい。そのために、過去のものも良く知らなくてはいけない。

建築設計製図第一/第2課題

Second-year studio Work: Spring Semester

「都市部の住宅」

"House in the City"

担当:

八木幸二 [教授] 藤岡洋保 [教授] 宮本文人 [助教]

YAGI Koji (Professor), FUJIOKA Hiroyasu (Professor), MIYAMOTO Fumihito (Associate Professor)

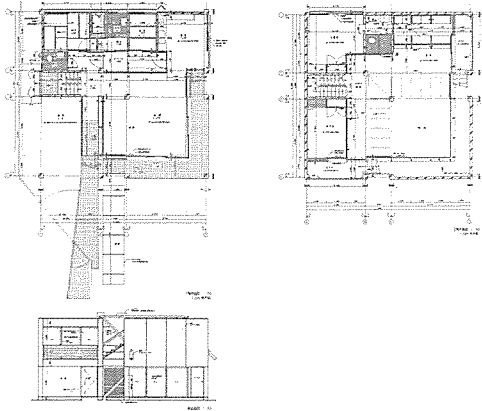
奥山信一 [助教] 塚本由晴 [講師] 那須聖 [助手]

OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer), NASU Satoshi (Assistant)

1—トレース課題:「JOH: 尖戸邸」(鈴木恂)

その1. 平面図、立面図を1/20の縮尺でA1ケント紙1枚に表現する。

その2. 矩計図を1/20の縮尺でA1ケント紙1枚に表現する。



平面図、立面図のトレース: 中川美香

2—住宅見学

①「プラタナスの家」(八木幸二)

② 夏休み中に住宅作品を見学し、設計課題の講評会前にレポートを提出。

※事前に、現在一般に公開され見学が可能な住宅作品を紹介

- 前川國男邸(前川國男/江戸東京たてもの園内)
 - 山田守邸(山田守/現・蔦珈琲店)
 - 直方体の森(篠原一男/現・中村正義美術館)
 - ちめんかのや(齋藤裕)
 - 夏の家(アントニオ・レーモンド/現・バイネ美術館)
 - 山邑邸(フランク・ロイド・ライト、遠藤新、南信/現・淀川製鋼所迎賓館)
- など

3—設計課題:「仕事場のある都市型住宅の設計」

"Urban-House with Workspace"

戸建ての住宅とか、オフィスというような建物の種類(ビルディング・タイプ)は、家族が暮らしたり、人が仕事をするための建物として全く疑う余地のないもののように見えますが、実は近代以降の産物であって、ある時代のある社会の中で成立してきたものです。戸建て住宅やオフィスビルを必要としない社会も地球上にはあるのです。近年の情報技術の発達、在宅勤務や遠隔会議を可能にし、産業構造の変化はソフト制作などの小さな組織による活動領域を拡大しました。こうした変化を捉えて、SOHO(Small Office, Home Office)というような言葉の流行もあります。このことは、住宅と仕事場を明確に区別していた社会とは違った建築の条件が、用意されていることの現れと言えるでしょう。

そこで、住む場所と働く場所の関係をこの新しい条件の中で再検討するために、仕事場を併用した住宅を設計しようというのがこの課題です。家族構成を各自想定し、快適で楽しい住宅の空間を的確に

図面化した上で、さらに、生活と仕事が共存する空間はどうあるべきか、そこでの生活や仕事はどのような相互影響を生むのか、といったことに対する提案を期待しています。

[設計条件]

建築規模: 原則として地上2階、地下室も可。

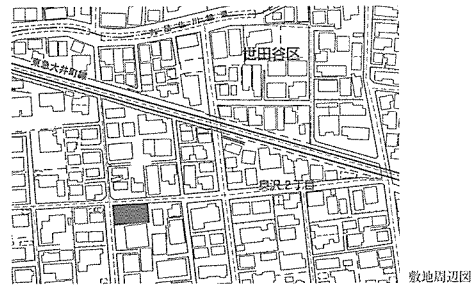
下記の法的制限を守ること。また、面積は最大限利用すること。

敷地面積: 247.3m²/用途地域: 第1種低層住居専用地域/建蔽率(建築面積の敷地面積に対する割合): 50+10=60%(角地による緩和10%) 最大148.4m²/容積率(延床面積の敷地面積に対する割合): 100% 最大247.3m³/第1種低層住居専用地域/高度地区: 第1種高度地区/高度地区による斜線: h=5mから1:0.6(真北方向から)/道路斜線: 1:1.25/最高高さ: 10m/後退距離: 北側道路は4m未満のため、道路中心線から2mの位置を道路境界線とみなす。

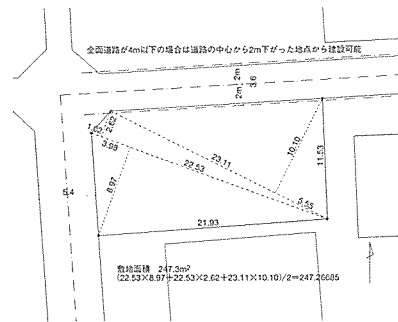
構造: 自由

[提出図面]

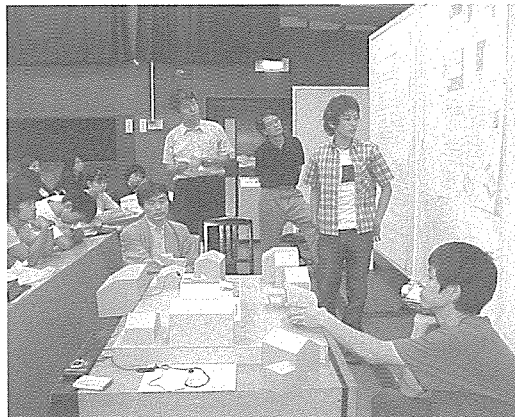
配置図(1階平面図及び造園計画を示す外構図をかねる、1/50)/各階平面図(1/50)/断面図(2面以上、1/50)/立面図(2面以上、1/50)/矩計図(A1一枚、1/20)/模型(1/50)/パース(数点)/アイソメトリック図もしくはアソメトリック図(設計意図を最も明快に表現できる図とすること)/その他、設計意図を表すのに必要と思われる図面(フォトモンタージュ、模型写真、スケッチなど)を各自追加して欲しい。/設計主旨/建物名、各自の設計主旨を明確に表現したタイトルを付けること。/作図はインキングとする。コピー・張り込み等は禁止、着色は自由、文字は日本語とする。/用紙は各自用意、色は白、図面レイアウトはA1横使いを3枚とする。/提出時に用紙をA1サイズ(841×594)にカットしておくこと。



敷地周辺図



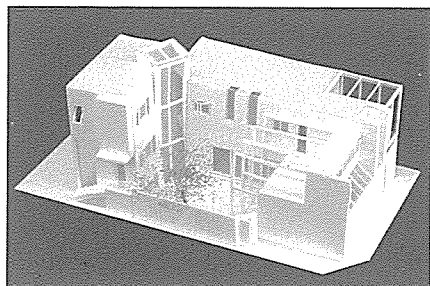
敷地図



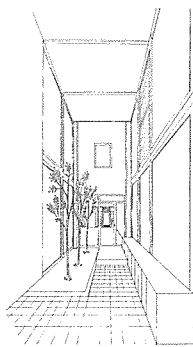
設計課題講評会風景

以下は1999年9月2日[木]に行われた講評会を学生編集委員の高橋寛(M2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

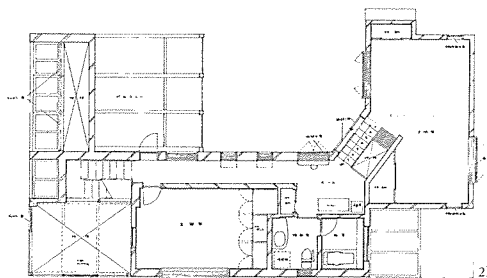
「発見ハウス」石原奈緒 ISHIHARA Nao



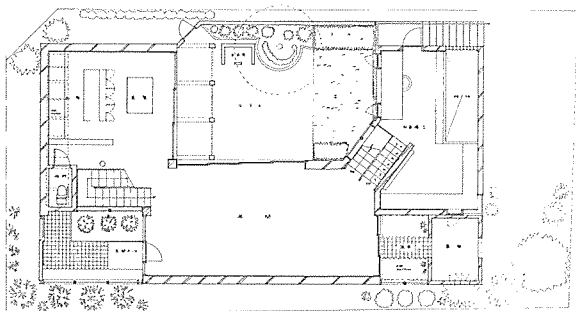
模型写真



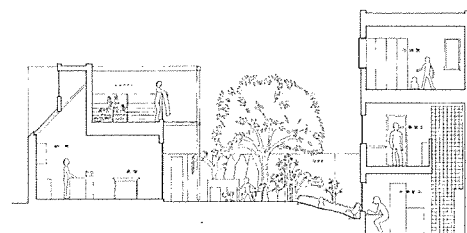
玄関ホールパース



2階平面図



1階平面図



断面図

石原——写真家である父と母、男の子2人の4人家族のための家です。父親にとって家族との関わりや日常のはっきりとしたコマを大切にしたいと思いました。仕事場は半地下と半二階になっており、仕事場と食堂や居間などの共用スペースの間にテラスを挟んで視線がつながるようにしました。また階段室によってすべての部屋を動線的につなぎ、そこを歩く姿を見ることができます。

藤岡——空間の細かいところとか情景や関係を考えながらつくるのはとてもいい。ただ、デザインには他のアプローチもあり得るので、今後他の可能性にも目を配ってほしい。

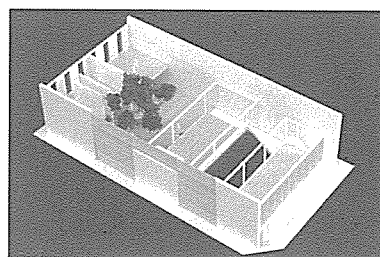
塚本——天井が高くて人がいけないうようなところはどのような考え方でつくったのですか。

石原——母親のためのキッチンを空間的によい場所にするためです。

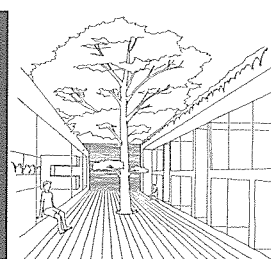
塚本——居間とか厨房という機能から考える人が多いけれど、これは光をどう入れるかとか街からどう見えるかといったいろいろな考えが入ってきているところがおもしろい。

奥山——特に新しい空間というわけではないけれど、形はよくつかめている。あまりちまちましないように。

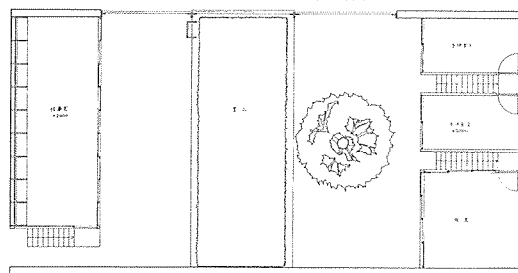
「ダブルコートの家」倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko



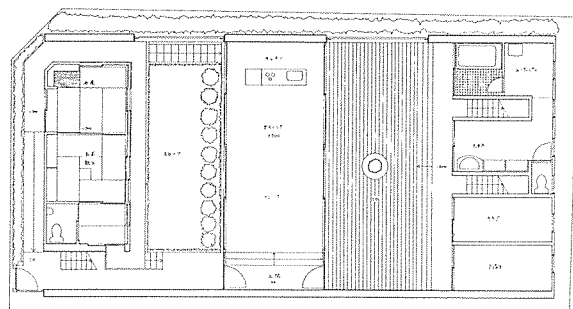
模型写真



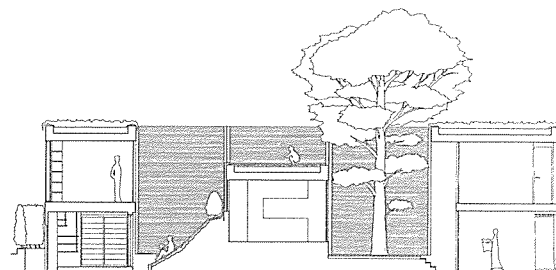
内観パース



2階平面図



1階平面図



断面図

倉林——両親と幼い子供2人の4人家族のための家です。この家は個室、家族室、仕事場の3つのボリュームと、それらにある2つのコートによって構成されています。中央の家族室は他の部屋と半階分レベルがずれていて視線が交錯しないようになっています。西側のコートは仕事場と生活の場を分ける役目を果たしているのに対して、東側は家族室と個室を結ぶ役目をしています。

藤岡——これぐらいのスケールだと外部も含めて床レベルを合わせてフラットにする方法もあると思うのだが。

倉林——レベルをずらすことによって直接的な視線の交錯を避け、何となく全体の雰囲気を感じられる空間が作りたかった。

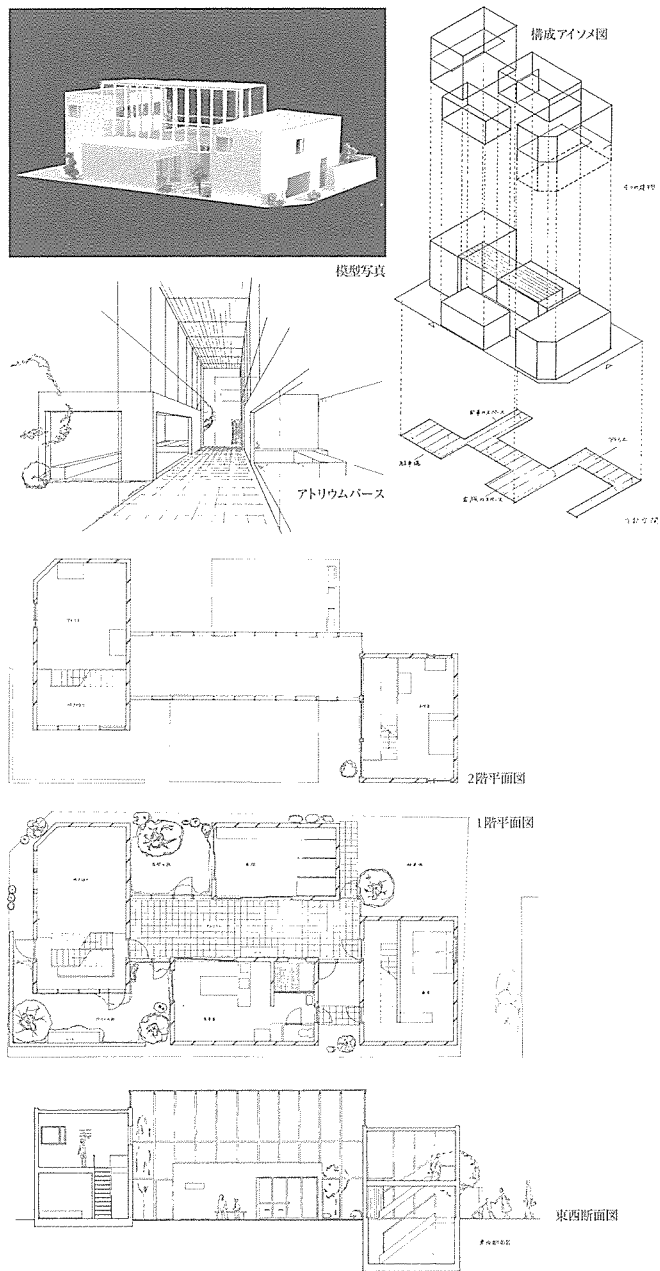
八木——図式的だけれども、ここまで考えが進むと説得力がある。視線を気にしているなら屋上レベルとの視線の関係も考えた方が良かった。

塚本——大きさのせいもあるが、箱庭的になって全部つくられた世界という感じがある。車が入ってきてその世界がゆらぐぐらいが良かったのではないかな。

「都市部の住宅」

"House in the City"

「間を喜らす家」古閑めぐみ KOGA Megumi



古閑——絵本作家の父と絵画教室の母と2人の小学生の家です。建物と建物の間にたまたまできるような空間に新しい意味が生じることを住宅の中に取り入れるために、機能別に分けた4つのボリュームの間にできる空間を積極的に使おうとしました。それらのボリュームがあまり離れない関係にするために、中心にできた空間をガラスで囲い、内部と外部をつなぐような空間にしました。

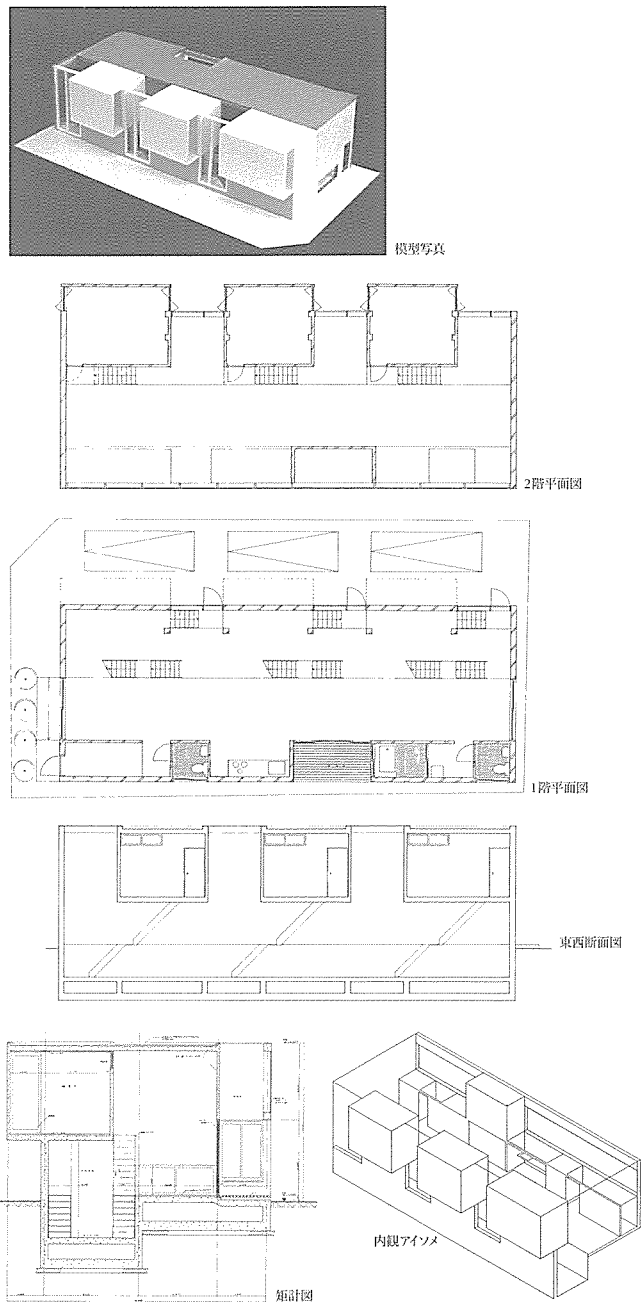
藤岡——内部化された外部が重要なんですね。説明を聞くと4つのボリュームが中心の空間にはみ出してきた方が趣旨に沿っているような気がする。

塚本——ガラスの部分はそれ自体が図として取り出されているから、内部に対しても外部に対しても中立的で独立したものにしているところがおもしろい。

八木——仕事場と外部空間の関係はないわけ？

古閑——中心的な屋根のかかった空間は生活の場にしたかったので、仕事場のための外部空間は屋根のかかってないところが対応しています。

「マカロニほうれん荘」桜井春美 SAKURAI Harumi



桜井——住人は夫婦と独立した2人の子供の4人家族で、全員が漫画家という設定です。閉じた個室と長い共用部分と3人分の連なった仕事場をスキップフロアによってつなげました。個室の下の半地下部分がそれぞれの仕事場として対応しています。共用部分は長いので、距離感によって使われ方が決まります。

藤岡——図式的だけど、外側から見た個室のボリュームのプロポーションや個室への光の入り方が独特で、とても魅力的なのは。

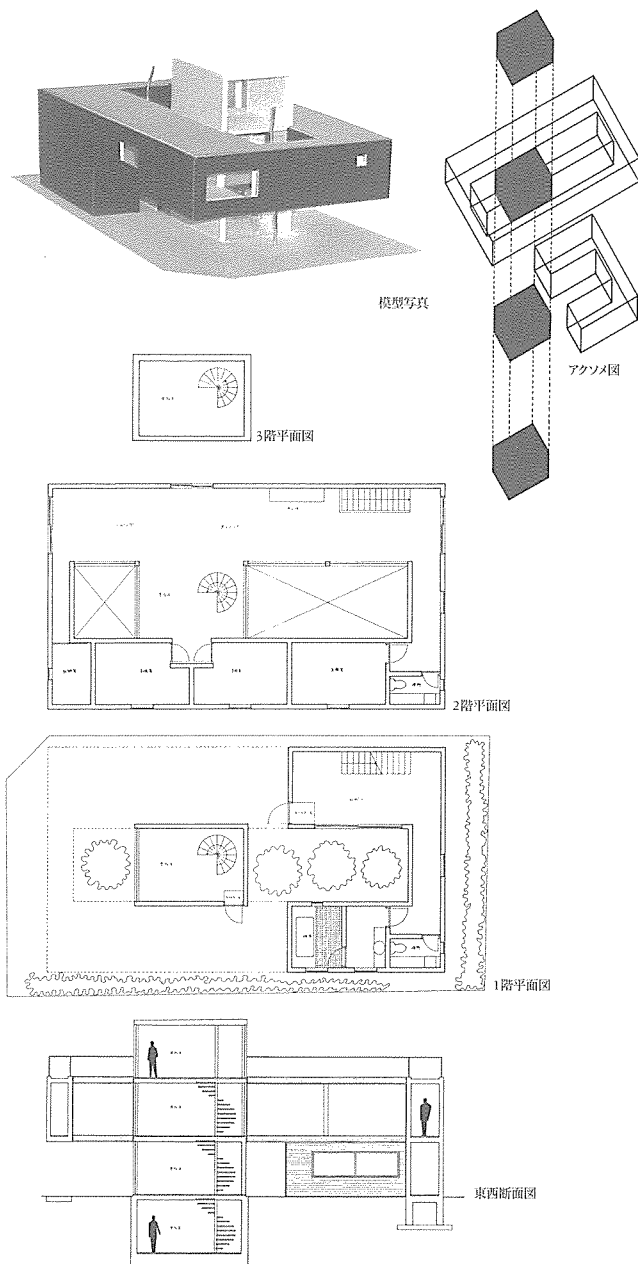
八木——全体は面白いのだが、南側のテラスがよく分からない。

塚本——風呂用にとった外部ということでしょう。

奥山——家具の配置とかを描いてほしかった。仕事場に棚とかがあるんでしょう。そういうので空間に具体性が出てくると思う。

八木——そうすれば仕事場に柱をたてなくても、棚とかで構造も解決できたかもしれない。全体の考え方としては、最初は無理な設定だと思ったけど、それなりに成り立ちそうにまとめたという上手さはある。

「奥沢タワー」玉井洋一 TAMAI Yoichi



玉井——コピーライターの夫婦の家です。コピーをひらめかせるには空間もきっかけになると思い、光の量やレベル・見える景色で違いをつけたオフィスを4つ重ねたタワーが住宅のボリュームに突き刺さった構成になっています。

塚本——全体としてはタワーに見えないからタイトルが良くない。

藤岡——この敷地にたいして左右対称の格好をとることがプランニングに有利に働いていると思いますか？形式にこだわりすぎていて、はめ絵的に納めざるを得ないところがあったのでは。もう少し変形していてもあり得るのではないか。

塚本——水平なものを垂直なものが貫く図式はありうるけれど、一つ一つのスペースが結構ぞんざいで豊かな感じがしない。その場所がどういう性格の場所になるかという条件づくりまではできてるけど、その条件をどうやって空間を定義するために引っ張り上げるかはその後の作業にかかっている。

【総評】

八木——印象としては割に良くできていた気がします。考えることが好きで特に何かにこだわって一生懸命やっていた人がいたので、とても可能性があるような気がしました。発表した人の他にも面白そうな案があったので、今後も頑張ってください。

藤岡——今回発表できなかった人の中で、なぜ自分のがだめなんだと思われた人もいるかもしれないけど、どれくらい可能性があり得たかなということも我々の評価の基準の一つになっていることを知って下さい。みんないい建築をつくりたいけれど、実はいい建築って何かわからないんだよね。ただ社会の中で共通の了解として何らかのものが存在する。だけどそれがベストだということも解らないし他の可能性もあるかもしれない。そういう結果が常にオープンなのがデザインの世界なんです。そのためにいろんなアイデアを参入する可能性があるし、説明の体系をどうやってつくるかということもある。逆に一つの言葉がデザインを触発する場合もある。その辺のダイナミックな状況をこれから設計を進めていく上で注意しながらやっていって下さい。割りと頑張っているなという印象があったので今後楽しみにしています。

奥山——第1課題の「最小限住居」は、身の回りのものの延長で空間を捉えてほしいということでしたが、今回はそれを忘れてしまった人が多い。これから課題のスケールが大きくなっていくけれど、そのときも身の回りの延長で空間を捉えることも忘れないでほしい。それをすっ飛ばしてやる方法もあるけれど、それはきちんと論理武装をしてやって下さい。今回その辺のことを考えてくれた人が何人かいたし、身の回りの空間のつくり方と建築の構築的なつくり方のバランスがとれていた人もいました。だけどバランスをとることが必ずしもいいということでもなくて、最終的な図面は抽象化してもいいと思います。雑誌に載っているいい建築の図面は、いろんな事を考えた上で、それを省略した方が空間の骨格がよく見えるのでそういう描き方をしているんです。図面は抽象化してもいいけれど、具体的なものを考えた上で抽象化してほしいと思います。

塚本——今回見た範囲では、図式的な人は図式的な方に偏っているし、そこでの生活やその場所から何が見えるかといった具体的な事から詰めていく人はそちらに偏っていたように思います。具体的に細かいものを積み上げていった案はちゃんと見ないと解らないけれど、図式的なものはぱっと関係が理解できちゃうので、具体的なものより図式的なものの方が講評会に選ばれやすいのかなとは思いますが、多くの場合がそこでの生活とか本質的なものとの関係なく、単に人を説得させるためだけの図式になっているように感じました。そういう人は図式だけじゃなくて、動物がいろいろ材料をかき集めて巣や生存環境をつくり上げているのと似たようなことを人間もやっているという種類の視点ももってほしいと思う。図式的なものはいかにまとまってるし、クールだし、現代的な感じがするんだけど、今日みせてもらったものにはユーモアがないから生きるための条件の根幹をつかっていく感じがしない。もう少しみなさんの中で、図式的なものとの具体的なものの関係がうまく解け合っていくといいなと思います。

建築設計製図第三/第1課題

Second-year studio Work: Spring Semester

「博物館」

"Museum"

担当:

半澤重信 [非常勤講師、半澤重信研究室]

HANZAWA Shigenobu (Guest Professor, Hanzawa Institute of Architecture and Conservation of Artifact)

芦原太郎 [非常勤講師、芦原太郎建築設計事務所]

ASHIHARA Taro (Guest Professor, Taro Ashihara Architects)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)



半澤重信

HANZAWA Shigenobu

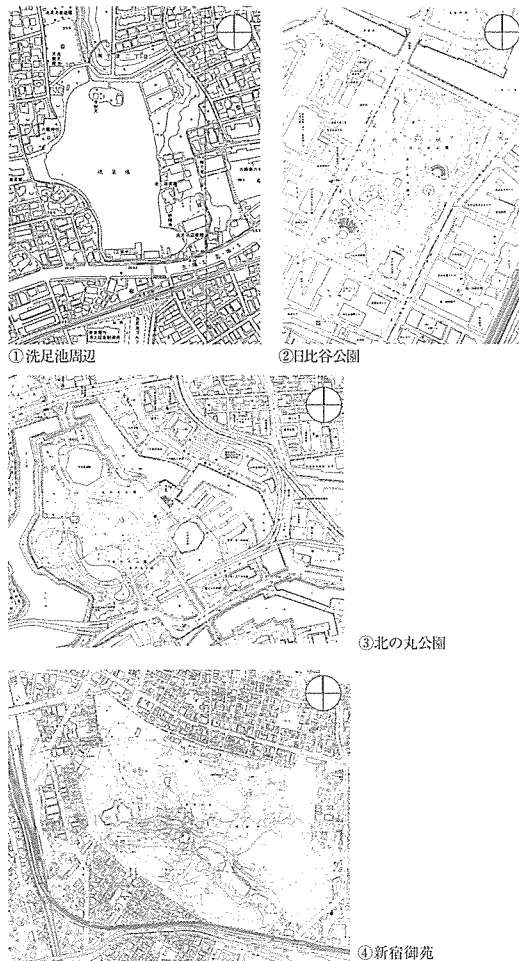
1930年東京都生まれ。1953年東京工業大学建築学科卒業。1956年同大学院修了。1957年文化財保護委員会事務局。1991年から半澤重信研究室。主な作品：新宮殿舞楽舞台、東京国立近代美術館工芸館、国立劇場・舞台機構、THE HOUSE OF JAPAN (New York)、国宝・中尊寺金色堂覆屋 (改修)、東京都庭園美術館 (保存・改修) など



芦原太郎

ASHIHARA Taro

1950年東京都生まれ。1974年東京芸術大学美術学部建築科卒業。1976年東京大学大学院建築学修士課程修了。1977年芦原建築設計研究所。1985年から芦原太郎建築事務所。主な作品：笠間日動美術館東館・本館、文化交流施設水鳥サロン、宮城県白石市立白石第二小学校など



以下は、1999年6月3日[木]に授業担当教官に以下のゲスト・クリティークを加えて行われた講評会の模様を、学生編集員の東野晋二 (M2) がレポートしたものであり、文責は編集部にあります (敬称略)。

[ゲスト・クリティーク]

林昌二 [日建設計] **戸尾任宏** [建築研究所アーキヴィジョン] **服部紀和** [竹中工務店]

[講評会レポート]

この課題は、異なる性格を持つ4つの公園の中から、各自敷地を決定することからはじめられた。公園の中で建築がどのような役割を果たし、さらに公園の特徴をいかに建築に投影できるかという、周辺との関係を強く問われた課題であった。設計を進めるプロセスにおいて、大枠2つのアプローチが見られた。一つは、博物館のテーマから、内部空間の構成を導くものが挙げられる。今回掲載された中では、卜部案のような、展示物と展示空間との関係が主題となっているものである。この場合、公園という敷地に対して、建築が自立性を持つということの是非に対して議論がなされた。もう一つのアプローチは、敷地の性格を読みとり、そこから博物館のテーマを設定していくものである。例えば、鈴木案や平井案は、公園内の動線と建物を重ねることで、新しい博物館のあり方を模索していた。都市における公園が果たす役割と、博物館という文化的機能をどのように捉えるかが明確に示されている作品が結果的に評価されたようであり、ここに掲載された作品は、両アプローチが相互に展開され、豊かな展示空間と周辺に対する配慮が見られた作品である。建築ボリュームと空地の扱い方や、ビルディングタイプに対する新たなプログラムの提案に、学生たちの博物館に対する問題意識を読みとることができた。公園と博物館を一体的に計画するという事は、これまでの博物館の枠を越えて成立するという意味で、新しい博物館のあり方を感じさせた。

[設計条件]

敷地を次の4ヶ所から選定し、公園の改修計画と共に博物館を計画する。

博物館の内容は自由に提案すること。

構造も自由とし、規模は約4,000m²とする。

敷地：①洗足池周辺、②日比谷公園、③北の丸公園、④新宿御苑

[提出物]

1. 図面

a. 配置図 (1:500程度。周辺環境との関係が説明できるものであること。外構・植栽計画も行うこと) / b. 平面図 (1:200) / c. 立面図 (1:200) / d. 断面図 (1:200) / e. 詳細図 (1:50。展示室部分の矩計図または平面詳細図) / f. パース (内観、外観共)

2. 模型 (1:500)

3. 模型写真 (図面中にレイアウトすること)

4. コンセプト (800字程度にまとめ、図面中にレイアウトすること)

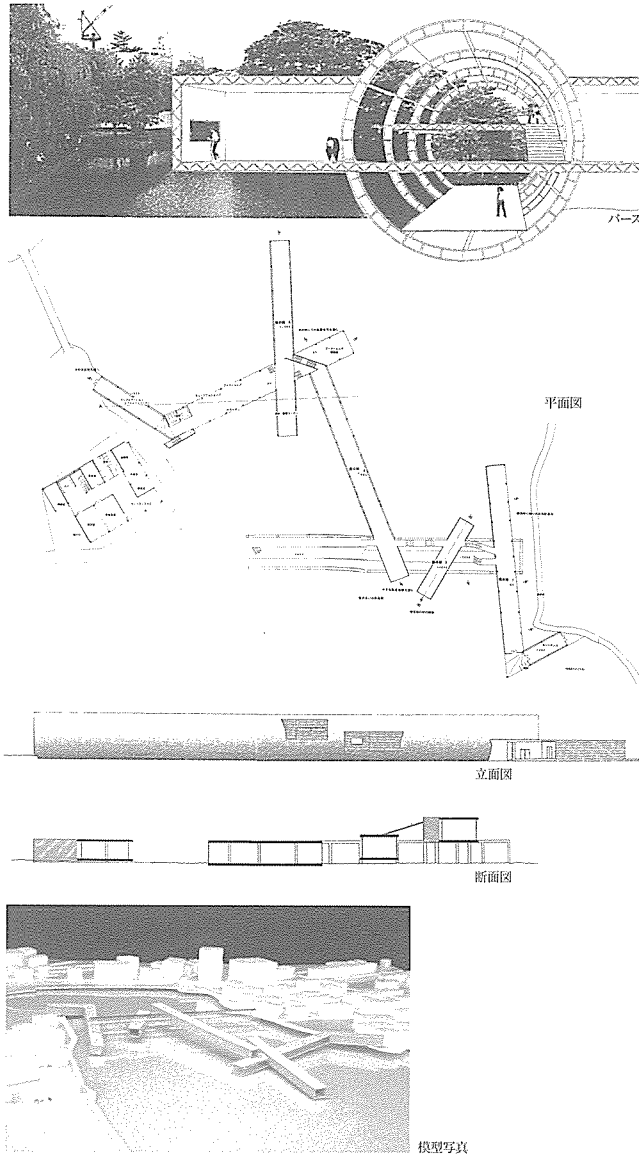
※図面サイズはA1版 (縦横は自由であるが、どちらかに統一すること)

必ず学籍番号及び氏名を図面中に入れること (原則として右下)



講評会風景

鈴木悠子 SUZUKI Yuko



鈴木——洗足池の周りは、自然と建物が混在していて、それらをアートとして見せようと考えました。建物は、チューブが重なったような形で、チューブの方向はそれぞれ洗足池周辺の風景を捉えています。チューブを通ることで新しい発見をさせることができると思います。

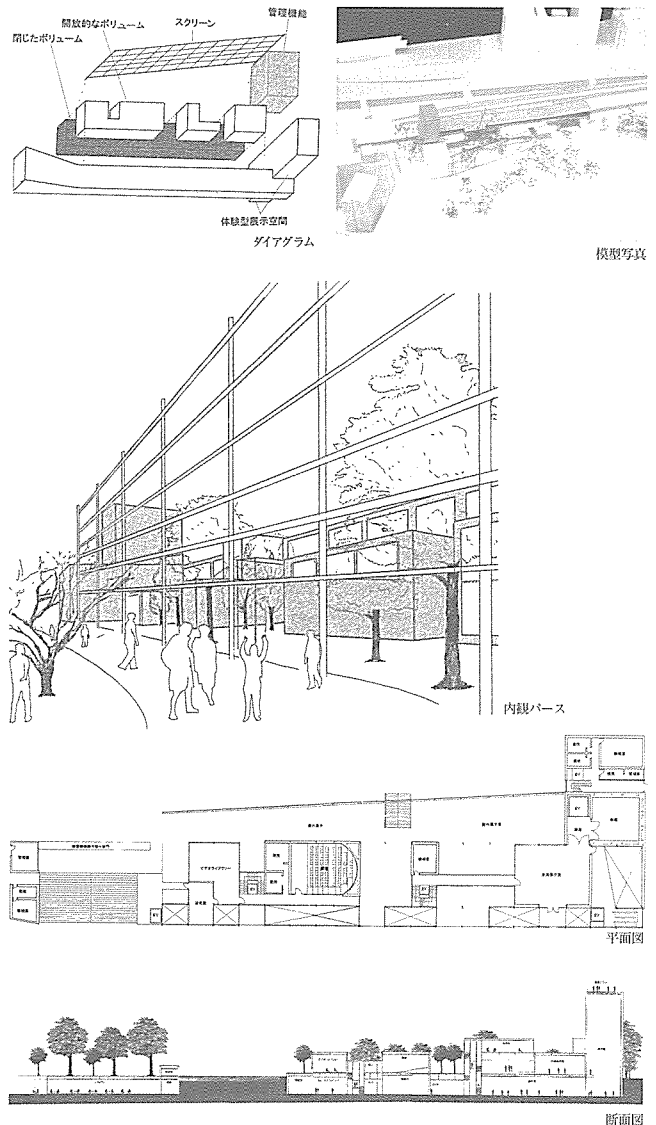
林——これは面白いと思いました。ただ、水との関係がもう少し考えられると……。例えば、中を通る人のレベルをもっと下げ、建物の上も歩けるようにすると、行って戻ってくる気になるでしょう。水面とアイレベルをどうするかを考えるともっと面白くなったと思います。

服部——建物全体が水に浮かぶ彫刻のような感じで、非常にプロポーションがいいですね。動線としてだけでなく、POPアート系のパブリックアートのような感じでした。

芦原——水面に作るということと、周辺を見せるという少ない要素で、非常にうまくまとめた案だと思います。細かい点での問題はありますが、例えば、切り取られた風景は本当に良いのかどうかとか、そのあたりも考えられるとさらに良かったと思います。

戸尾——欲を言うとパースが下手ですね。今回は写真だけで十分に分かったのではなかったでしょうか。しかしパースも大切ですから上達するよう努力してください。

小林徹也 KOBAYASHI Tetsuya



小林——千駄ヶ谷駅は片方にしか開いておらず、新宿御苑とも関係を持っていないので、ここに計画することで表と裏を無くしたいと思いました。体験型の展示室を計画していて、実際にカールルイスが走り終る姿が液晶画面で見ることが出来ます。そのため、建物のボリュームが大きくなってしまっていますが、建物内を回れるようにして、駅と御苑をあまり分断しないように考えました。

芦原——部屋の機能とは別に、閉じたり開いたりといった別の次元で考えているのが良かった。展示の内容もただ部屋を作るだけでなく、方法まで提案していて、将来有望なのではないかと思います。

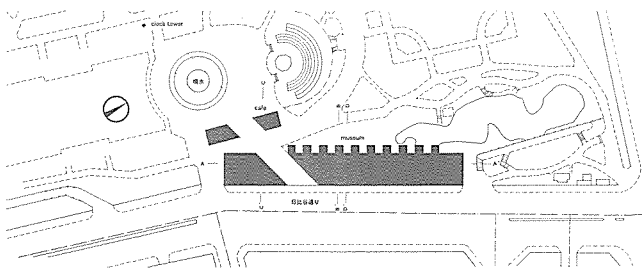
戸尾——新宿御苑と駅、建物の関係が図面からは良く分からない。電車から見るとか、建物から公園に入って行けるとかをもっと示してほしいかったです。

服部——断面図を徹底的につめていって、周りの東京都体育館とか国立競技場とかまでを視野に入れていったら、配置の選び方とこのテーマはパーフェクトだったのではないのでしょうか。

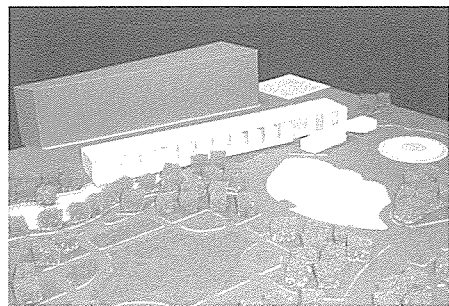
半澤——配置を見ると電車と少し近すぎたのではないのでしょうか。もう少し離すか、駅と一体化させると違う面白さがでたと思います。

林——現実とはともかく、本当はどういうものが作りたいのかを示さないと、単に駅前ビルになってしまいますよ。法律とかは気にしないでいいので。どうせ建たないんだから。(笑)

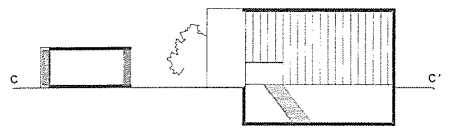
越路龍一 KOSHIJI Ryuichi



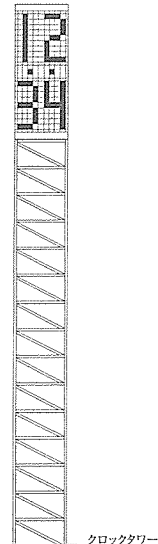
配置図



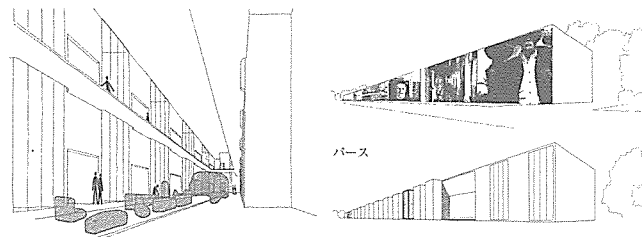
模型写真



断面図



クロックタワー



パース

越路——日比谷に工業デザインの博物館を設計しました。このあたりは企業の本社が多いので、博物館がひとつの広告塔になると考えたからです。展示は、ソニーやホンダといった企業性の強い物は一階に展示し、二階はイサムノグチや倉俣史朗などの作家性の強い工業デザインを展示します。それ以外のものは、一階に展示するようにしました。

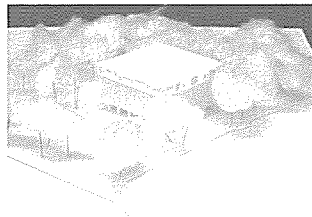
芦原——IDという現代生活に入り込んだものを展示するというコンセプトは面白いのですが、建物は一発アイデアのスクリーンに任せているのはズルイ。展示は一応整理されているのだけれど、本来建築家に任されるのはそこだから、単なる展示ブースになっているのがもったいないです。

服部——配置がすごく上手です。ビル街と公園の接点だから、パースとか立面図などでどのようにデザインされているかまで説明してくれると良かったと思う。

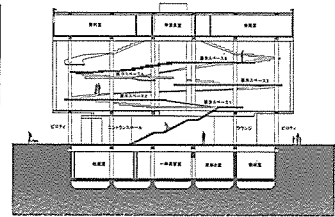
林——サイトは良かったんですけど、実際には、カフェと本館との間が何とも気持ち良くないと思います。ひとの視線とも関係がないし、公園とも関係が無い、あいまいなんです。

仙田——ゲートの的にカフェを置いているのがうっとうしい。カフェが無かったほうが良いと思います。

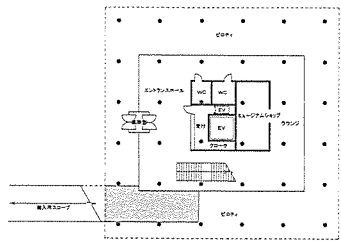
ト部悠加 URABE Yuka



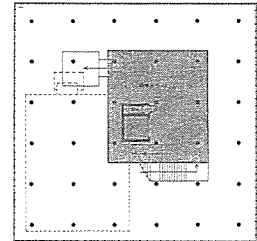
模型写真



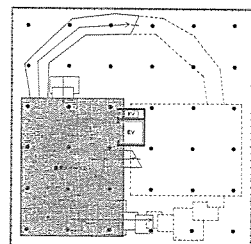
断面図



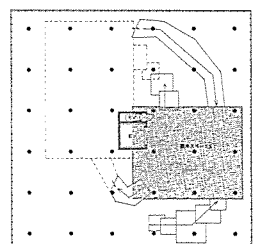
1階平面図



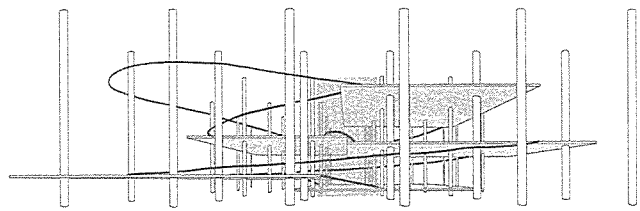
2階平面図



3階平面図



4階平面図



展示室パース

ト部——洗足池に椅子の博物館を作りました。大きな箱の中に床をランダムに配置してスキップフロアのようにし、それをスロープや階段で上り下りしながら見るようにしています。スロープや階段がただの移動空間にならないように、スロープの間にも展示できるスペースを設けました。

仙田——場所との関係はどう考えていますか。また、環境との関係で、一番いい場所と椅子との関係を説明してください。

ト部——夜になると光が無く暗いので、建物をガラスボックスにして夜でも周りを照らすようにしています。また、椅子に座りながら他のお客さんの動きが見られたりできるようになっています。

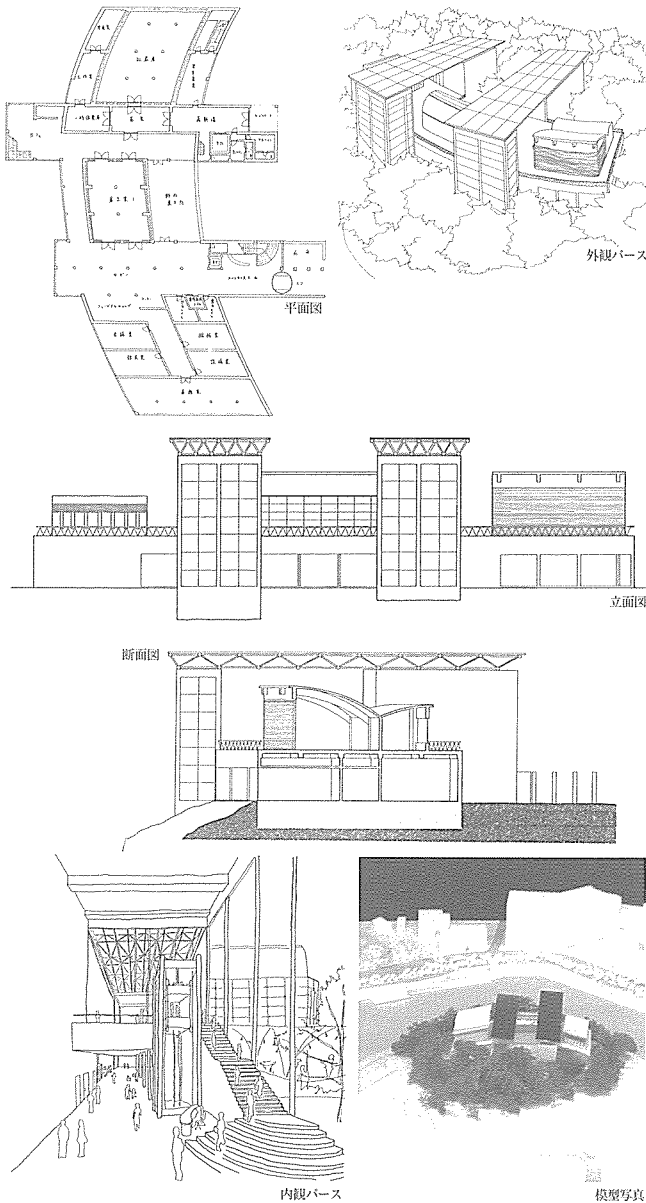
林——展示以外の場所が随分大きいですが、そこは何ですか。

ト部——事務所とか会議室などの管理のものと、あとはワークショップです。

半澤——管理を全部上に入れたわけですね。勤めている人は景色もいいけど、見に来た人には景色はどうだっていいということですか。環境をどのように関係させていくかを考えてください。

芦原——詰めが甘いということです。フロアを分けるだけでなく、時代や文化と共にスペースを分けていくなど、展示の背景もいっしょに考えてください。

池田太亮 IKEDA Taisuke



池田——北の丸公園に光をテーマにした美術館を計画しました。周辺には文化施設が多くあるので、さらに公園内の充実を考えて配置を行いました。平面計画としては、大きなボリュームの中に2つのボリュームを入れることで3つの場所を作り、それぞれを収蔵、展示、管理としました。二階は人々が参加できる多目的な場所とし、参加できる美術館としました。

林——照明器具だと照明器具屋さんで大差ないだろうし、それなら地下でも良いし、夜だけの営業でも良いのではないのでしょうか。

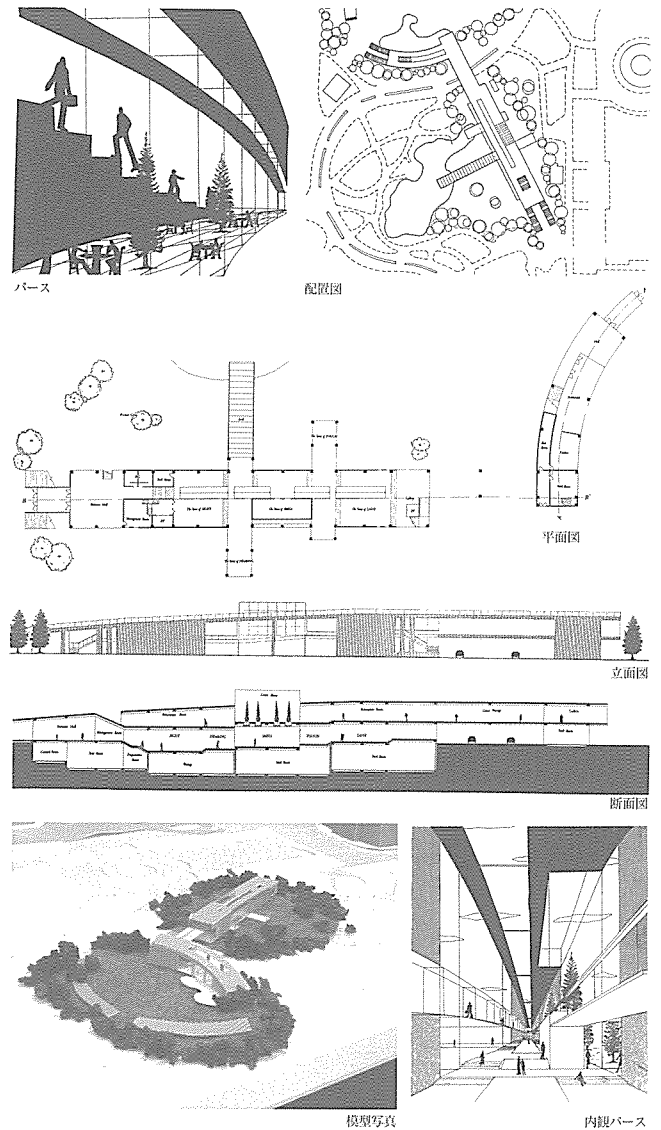
池田——地下にしなかったのは、対岸から見たとき、建築が1つの照明になるようにしたかったからです。

芦原——最初から光がテーマであれば、建築空間そのものが光の効果をテーマにした方が良かったのではないのでしょうか。

仙田——建築そのものが物理的な光や色彩を考えて掘り下げないと、北の丸に光の美術館を作る理由が良くわからないよ。模型は良く出来ているけど。

半澤——夜の利用をどうするのかを図面でも見せたほうが良い。計画は良く考えているのだから、もう少しがんばって。

神村英里 KAMIMURA Eri



神村——日比谷公園にリラクスの博物館を計画しました。リラックスということから、五感をテーマにしました。部屋に入ってはまた出てというのではなく、スルスと道を歩く感じを得られるようにしました。休んでから出るとか、食事したり、ギャラリーを見たりと、利用方法によって順路が変えられるように3つの出入り口を作りました。建物の上を通ると日比谷公園が一望できるようになっています。

芦原——この建物はリラックスさせるところなのか、博物館なんだけどリラックスできるのか、リラックスを知る所なのかどれですか。

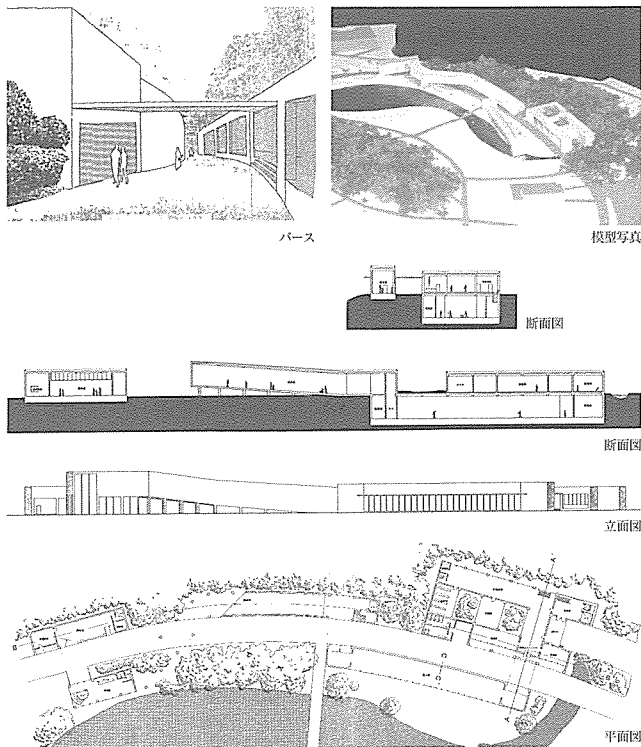
神村——一階では、それぞれ展示室で音やにおいを展示しているのですが、二階のリラクゼーションルームでは、五感全体を使って休めるようになっています。

戸尾——色を塗っている部分でいろいろ見て、上に乗って全体的に体験して、その後どこへ行くのですか。少し心配するのは、リラックスするために人が来て、たちまち人がいっぱいリラックスできないのでは無いかと思ったのです。(笑)

半澤——テーマと配置の関係があまり良くわからないですね。公園全体をどうしたいのかを考えてください。

林——環境からいうと一番リラックスできそうなのは、屋上なんです。上がっていけるようになっているけど、屋上が上手く設計されていませんね。そこをもっと設計すると良いと思います。

平井 晶 HIRAI Aki



平井——北の丸公園の中に美術館を作りました。道沿いに計画したのですが、緑豊かで、静かな場所ということでこの場所を選びました。展示室は分棟で設計したのですが、ここを訪れた人が、自分の好みによって、見るところを選んで道を歩くように通りぬけていけるように考えました。

服部——配置図を見ると、建物と道があって、入ったり出たりしながら展示を見るんですね。それならば、道をもっと内部化して、展示壁として考えると良かったのではないのでしょうか。建物と道という二つの関係ではなく、商店街のような雰囲気を感じ込んでも良かったと思います。

仙田——あなたは道をそのまま残していますが、木を切って敷地をつくるのであれば、道そのものをもっとデザインすべきではなかったのでしょうか。

半澤——以前は道も展示空間として利用することも考えていたと思うのですが、今のようにしないで、そのままの方が良かったのではないかと思います。

服部——あなたのやりたかったことはウォークスルーなんだから、パースとかでその感覚を感じさせないと、建築、道、森が、バラバラになってしまう。面白いことをやっているとは思いますが、表現したいことと、図面が食い違ってきているような気がする。

【総評】

半澤——諸君の作品はかなり完成度が高く甲乙つけがたいですね。そもそも博物館とか美術館自体は現代に生きるわれわれの心を豊かにさせる。同時に先人によって遺されてきた私達に対するさまざまな憶いを、さらに後の世の人々の幸いのために伝える砦となるところに根本的な存在意義があります。その本質的なことを建築としてどう作り上げるか、もう少し掘り下げて具体化してもらえればさらに良いものになったと思います。一寸考えると博物館は雑貨屋みたいなもので、目につくものは何でも入れてしまう。しかし、本当は今言ったことから、博物館建築の究極の目的は資料・作品の保存にあって、展示とか調査・研究といった必須な活動はそれを支えるために行うのです。これを忘れてはなりません。だからその建築計画は、このことを絶対条件として考えることが大切なのです。さて、図面の表現はみんな上手くなったと思います。ただ、説明がわかりにくい。自分の意図を説明する練習もしてください。

芦原——みんながんばっていました。どの学校でも一人ぐらいは全然ダメな人や、ものすごくできる人がいるのですが、そういった人がいないで、平均的にレベルが高かったというのが感想です。まだ三年生だからどうなるかわかりませんが、この課題で何かを掴んでくれたら良かったのではないのでしょうか。建築という世界は、答えというものはないので、限られた時間の中でどれだけ問題に肉薄するかが、重要だと思います。

戸尾——博物館の課題は大変難しいものだと思います。今回の課題でどういふものかが分かったと思うので、今後に生かしてください。昔は建物を作ると生活に寄与すると考えられていたのに、今は建物を作ると、こんなもの作らなくても良かったのと言われる時代になってきています。新しい建物が建つことで、環境をどのようによりよく変化させることができるかを考えてくれると良いかなと思います。あと、光というのは建築にとって非常に大切なものなので、今後設計を進める上で、光と空間の関係をもう少し考えてくれるといいと思います。

服部——力作をたくさん見せていただいて、さすがいい気分です。ただ2つの点について考えてくれるといいのではないのでしょうか。一つは、オブジェクトという点での建築、もう一つは環境ということについてです。課題の目的は何なのか、訪れる人は何を見るのか、木一本から周りの建物まで、どうなっているのかを良く見て、自分の建物との関係を考えてください。自分の建築が、周りのいいところをうまく引き込むことで、名作が生まれると思います。

仙田——図面とか表現とか言葉とかも大切なんです。じっくり見ると味があるとしても、表現力もつけてください。

建築設計製図第三/第2課題

Third-year studio Work: Spring Semester

「大空間建築」

"Superlarge Space"

担当:

鈴木エドワード [非常勤講師、鈴木エドワード建築設計事務所]

SUZUKI Edward (Guest Professor, Edward Suzuki Associates Inc.)

金箱温春 [非常勤講師、金箱構造設計事務所]

KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

小野英哲 [教授] **瀧口克己** [教授] **小河利行** [教授] **仙田満** [教授] **井上寿** [助手]

ONO Hidenori (Professor), TAKIGUCHI Katsumi (Professor), OGAWA Toshiyuki (Professor),

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

[設計条件]

大架構で覆われる部分の投影面積が5,000m²以上の空間を計画する。

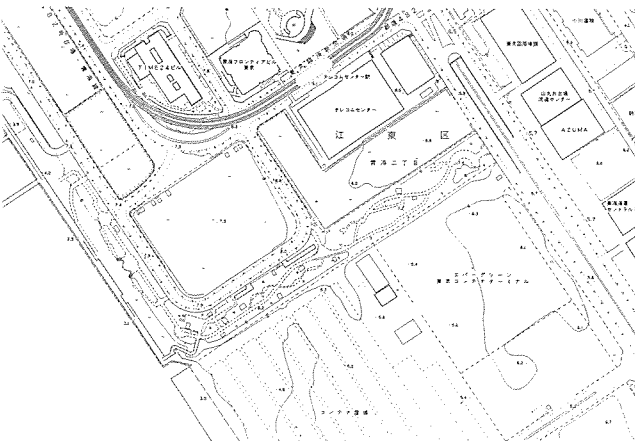
構造方式・材料:自由/敷地:どちらかを選択し、周辺環境の整備についても提案すること。①臨海副都心13号地公園、②横浜みなと未来21地区新港町/機能:自由/スポーツ施設、展示場、ホール、レクリエーション施設など自由に設定して良い。

[提出物]

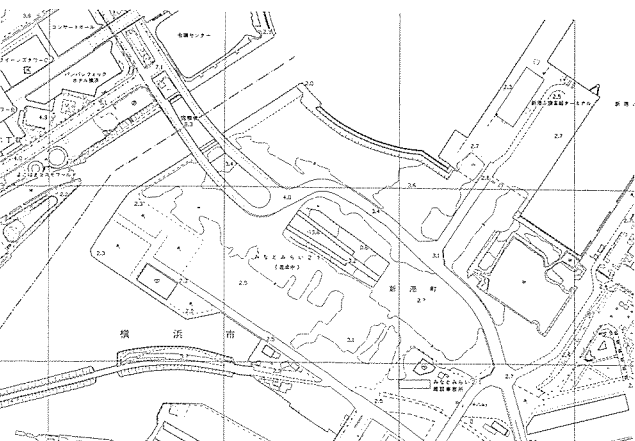
1.図面

以下をA1版4枚以内に納める。

a.配置図(1:500程度、周辺環境との関係が説明できるものであること。必要であれば、周辺地区の既存施設を見直すことを併せて提案してもよい)/b.平面図(1:300、各階)/c.立面図(1:300、2面以上)/d.断面図(1:300、2面以上)/e.説明図(計画主旨及び構造システムを模式図等を用いて簡潔に説明すること。)/f.仕上表(主架構を含む主要部分のみでよい)/g.パース(着色とし、外観・内観(大架構で覆われている部分)各1面以上)/h.模型写真(図面中にレイアウトすること)



敷地図:①臨海副都心13号地公園



敷地図:②横浜みなと未来21地区新港町



鈴木エドワード

SUZUKI Edward

1947年埼玉県生まれ。1971年ノートルダム大学建築学科卒業。1974年フラー&サダオ/イサム・ノグチ ファウンテン&プラザ。1975年ハーバード大学院 アーバンデザイン建築学修士卒業。1975-76年丹下健三都市建築設計事務所。1995年米国ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン客員教授。同年ハーバード大学GDS客員クリティック。主な作品:ジュールA、ムバタ・ロッジ(ケニヤ)、JR東日本・赤湯駅舎、日本点字図書館



金箱温春

KANEBAKO Yoshiharu

1953年長野県生まれ。1975年東京工業大学工学部建築学科卒業。1977年同大学院修了、横山建築構造設計事務所入社。1992年金箱建築構造設計事務所設立。1998年日本建築構造技術者協会賞受賞。主な作品:京都駅ビル、新京橋交流プラザ、ふれあいセンターいずみ、遊水館、潟博物館、広島市立基町高校

以下は、1999年9月2日[木]に授業担当教官に以下のゲストクリティックを加えて行われた講評会の模様を、学生編集員の稲毛誠(M2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[ゲスト・クリティック]

戸尾任宏 [建築研究所アーキヴィジョン] **有田桂吉** [石本建築事務所]

大野隆造 [人間環境システム専攻・教授] **元結正次郎** [人間環境システム専攻・助教授]

堀田久人 [助教授]

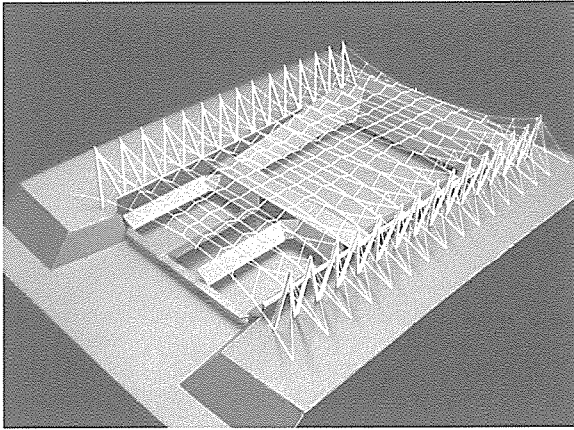
[講評会レポート]

この課題は、海を共通のテーマにもつ2つの敷地から選択することになった。全体を通して、敷地の選択は最終的な建築に如実に反映されており、意識的に、又は無意識に周辺の環境の影響を受けていることが読み取れて興味深かった。私が直感的に読み取った2つの敷地の特徴は、まず臨海副都心13号地公園は直交する道路が周辺を囲んでいることで、比較的閉鎖的で海との距離感がある。それに比べ横浜みなと未来21地区新港町は、海岸線も道路も曲線を描いており、海との近さが魅力だ。こうした周辺の特徴と設計したい建築のデザインとのバランスをとることになるが、しかし単純にデザインと特徴をマッチさせるのがよいのではなく、新しい両者の関係を模索することが、新たなデザインのあり方の発見につながるのではないだろうか。構造についても同じようなことが言える。整合的な構造のあり方はテキストを見れば載っているが、整合性を崩してでもやりたいデザインというのがある、そのせめぎ合いに緊張感のある空間が生まれる。環境や構造の特徴を読みとった上で、どうデザインに反映させるかを真剣に考えられる課題であったと思う。

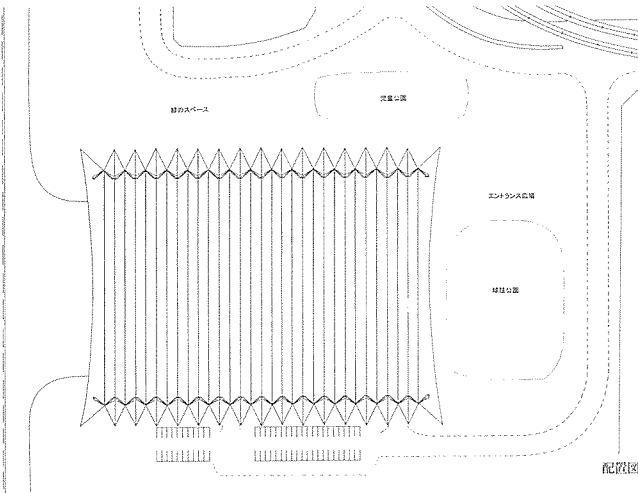


講評会風景

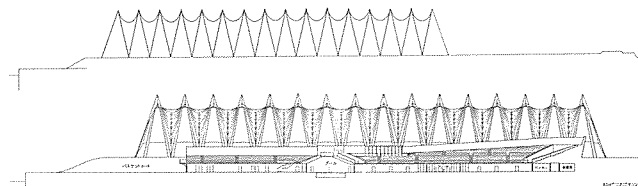
佐々木公也 SASAKI Hiroya



模型写真



配置図



断面図

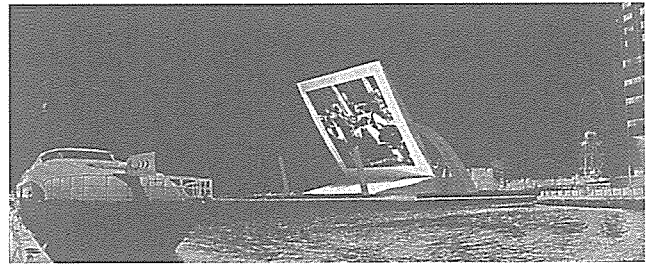
佐々木——お台場にスポーツ施設を計画しました。お台場は海岸が開放されているのが重要だと思い、人々がもっと自由に積極的に公園を利用して自然に接することを考えました。構造は膜構造で、この屋根は全体を覆っているだけで施設にはつながっておらず隙間が開いています。

鈴木——この構造システムは、単純明快で美しくすばらしいと思います。プレゼンテーションもよく、特に黒いバックに圧縮材の木と白いテンション材の糸を綺麗に表現した模型は上手だと思う。中の細かいレイアウトも大空間の課題についての提案として大変すばらしい。ただ、もうちょっとドローイングに力をいれてほしかったと思います。

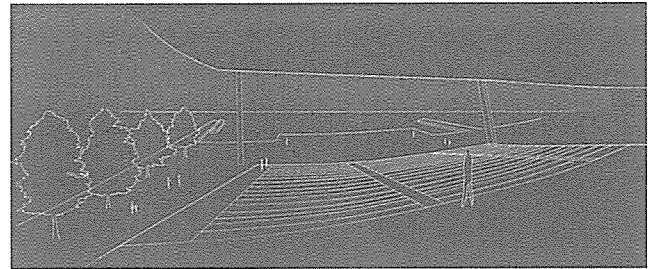
仙田——内観や外観もあまり力強さがありませんね。

金箱——構造システムはケーブルネット構造の一種で、よくできていて、壁で覆わなかったのがうまくいったのでしょうか。かなり変形する構造ですから、壁が入ると取り合い部で苦勞する。テンション構造をよく理解して、模型も糸でたるまないように作ってある。

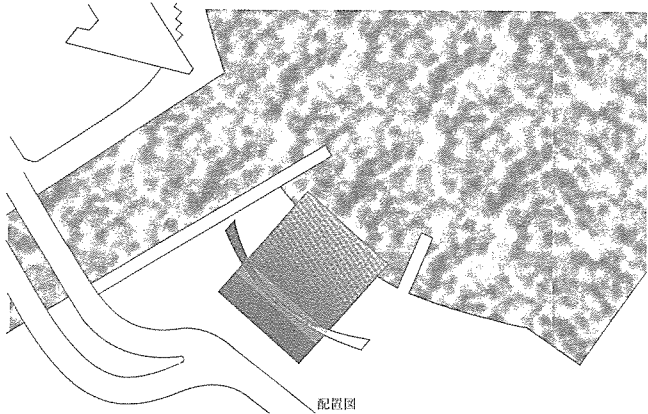
松原洋介 MATSUBARA Yosuke



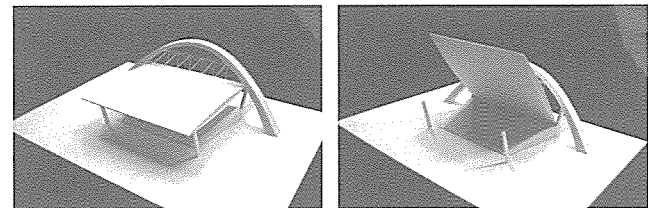
パース



内観パース



配置図



模型写真

松原——敷地は横浜の新港埠頭です。海と陸との関係性を強調するような建物を作ろうと思いました。架構が可動式になっているのですが、閉じている状態では、屋根の上を客席として、海側をステージとして客席から見るができるようになっています。海側がステージで山側が客席だという関係性が、屋根がスライドして立ち上がることによって今度は、客席だったところをステージとし、海の上を客席として、船からイベント等を見てもらおうと考えました。

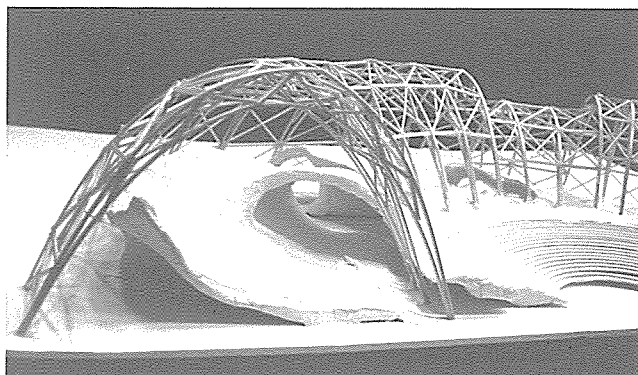
金箱——これはダイナミックな発想がよいと思いました。忠実につくられた模型のプレゼンテーションがたいへん面白い。

有田——コンサートホールではどうしても音を反射させる何かが必要になりますが、音を反射させたいときには、これを裏付ける機能がちゃんと備わっているようにすればよいという提案ではないかと思っています。

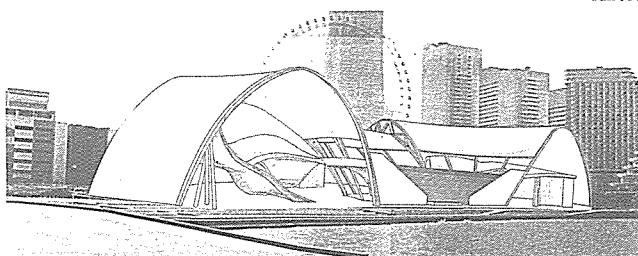
堀田——屋根全体を吊り上げるわけですよね。そこにもすごい水平力がかかる。レールでは間に合わないのではないのでしょうか。

鈴木——構造的な問題はありそうですが、それに負けない面白さがあるとおもいます。

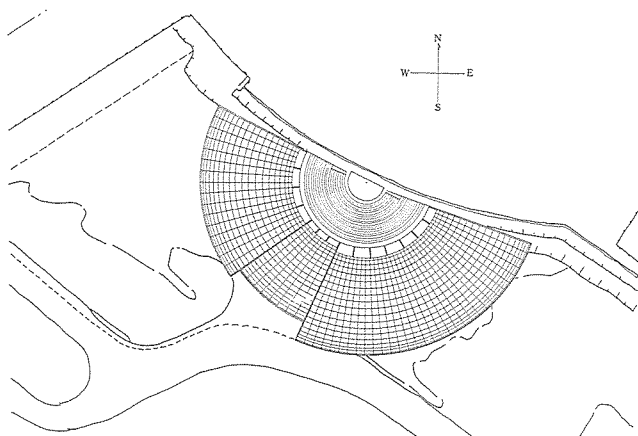
黒川智之 KUROKAWA Tomonori



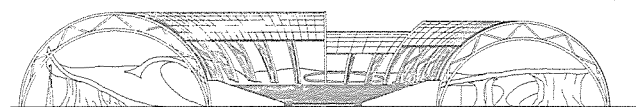
模型写真



パース



配設図



北立面図

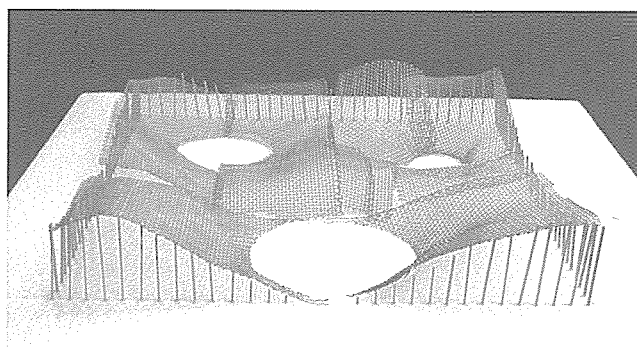
黒川——みなと未来の敷地に野外音楽堂、スタジオ、ライブハウス、クラブ、レコードショップを含む音楽のメッカとしての大空間を作りました。各施設は立体公園に包まれる感じで点在しているのですが、歩いている途中でいろいろな施設に立ち寄ることができます。構造は、内部はコンクリートスラブを曲げることによって生まれる面内応力を用い、外部にはアーチを用いています。

金箱——アーチの計画をした人は多かったのですが、この案は大きさに変化をつけた点が、よかったと思います。それから、下のコンクリートシェルと上のアーチの対比が空間として面白いと思います。

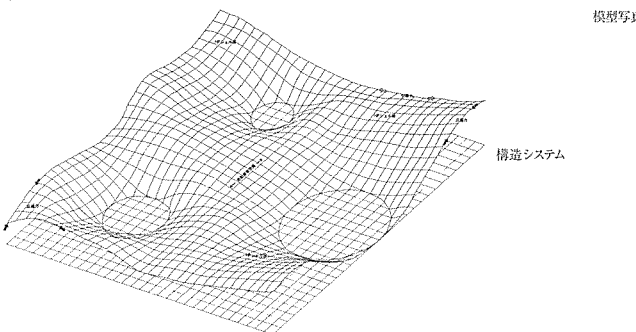
仙田——ヴォールトが一段小さくなっているのはどのような意味があるのですか？

黒川——全部いっしょだと、エントランスの位置がわかりにくくて気持ち悪いと思いました。どこかにアクセントをつけることによって断面に面白さを出そうとしました。

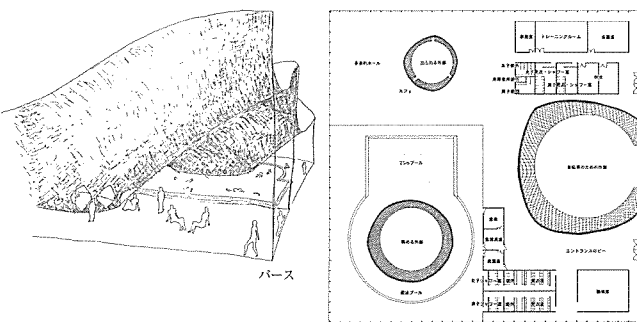
鈴木悠子 SUZUKI Yuko



模型写真

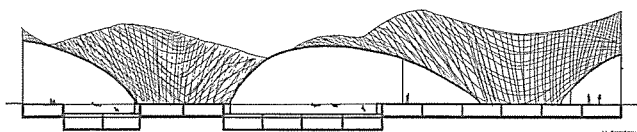


構造システム



パース

平面図



断面図

鈴木(悠)——私は、お台場という広大で平坦な土地で、土地全体を使ってスポーツができるように、下がプールで上がサイクリングコースとなっているような施設を考えました。この施設が建物だけで完結するのではなく、建物からお台場全体につながるようなものにしました。構造は、シェル面のような一枚の板をゆがめていって強くして支えるようになっています。

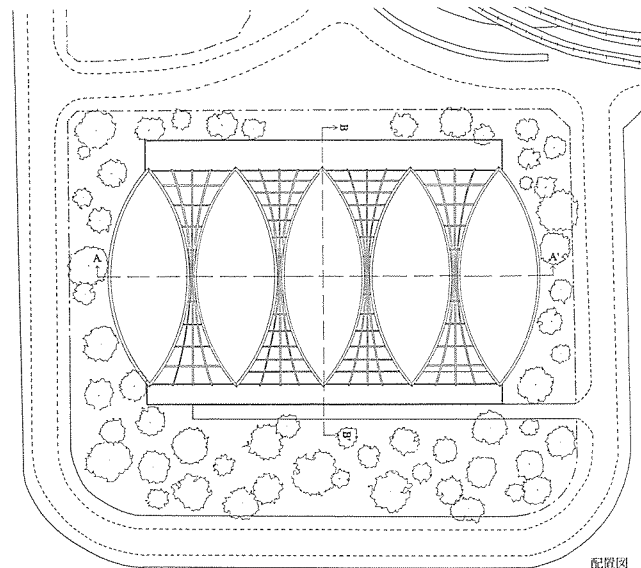
鈴木——四隅が一番高いところになっていますね。以前隅を地面に落とすようにしてアーチを形成したほうが強くなるという話をしたのですが、取れてそれをしなかった理由は？

鈴木(悠)——隅を落とすと、どうしても勾配がきつくなって上に登れなくなりました。

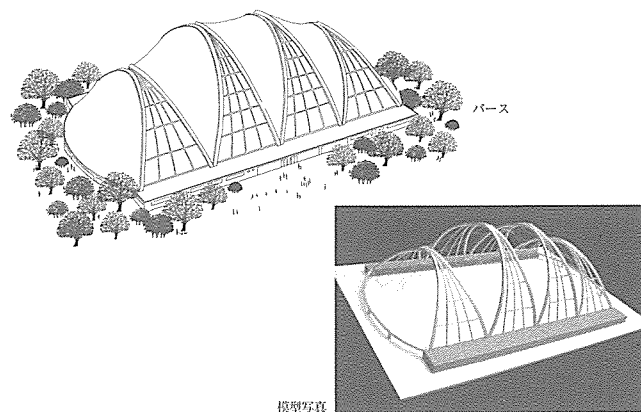
金箱——あまり一般的ではない構造ですが、決して実現できないという構造ではない。2方向に曲げることによって立体的な強さが出てくるから、薄い板でも広い空間を阻えるというのがこの案のいいところだったのですが、最後に出てきた形が少し弱かったかなというのが残念です。

鈴木——施設内容はサイクリングよりスケボーのほうが良かったんじゃないかな。

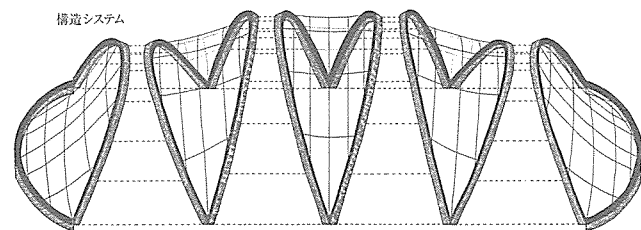
卜部祐加 URABE Yuka



配置図



模型写真



構造システム

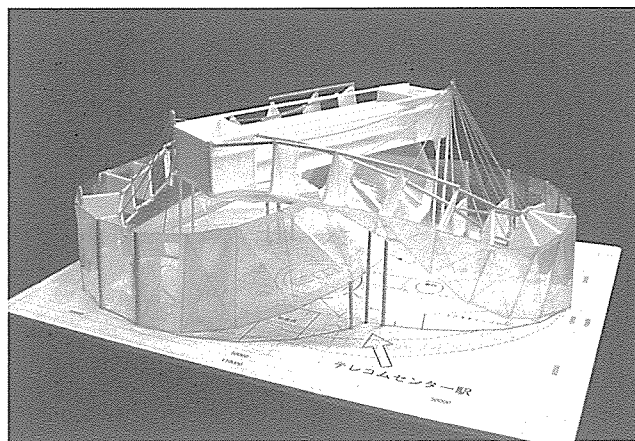
卜部——お台場に、植物園を設計しました。構造は、基本アーチ型フレームを角度を少しずつ広げながらつなげて作りました。屋根には膜が張られていて、その間はガラスにして、南から光が入るようにしています。北側にはゆりかもめが通っているの、中が見えるようにしました。

金箱——隣り合ったものをつなげると三角形になって強くなるという構造システムなのでしょう。だとすると、アーチどうしをつなぐ材をもっと強調するべきです。

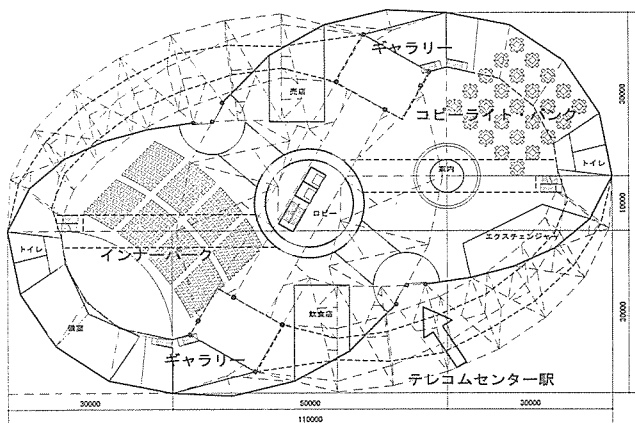
有田——平行になっている両桁の上に架構を架ける方法を提案されたわけですね。架構の特徴をもっと活かすために、これに拘わらずに架構にとってより好ましい平面形を考えてみる必要があったのではないのでしょうか。

戸尾——いわゆるテフロン膜は植物を育成するだけの光は通せないというデータがあります。それを植物園のところにもってくと他のエネルギーを使わなければいけない。大空間を作るとその後の管理のところまで考えなければならぬ。

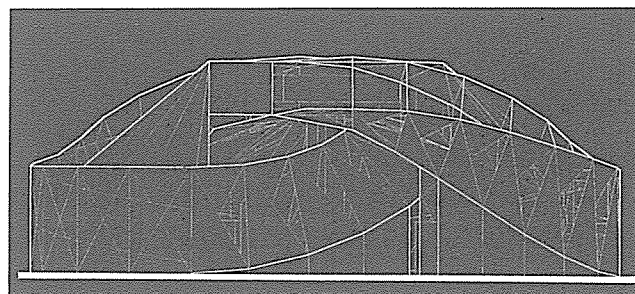
岡田康彦 OKADA Yasuhiko



模型写真



平面図



立面図

岡田——お台場に計画する大空間建築として、ネットワーク社会を前提としたマルチメディアの前線基地となる大空間を考えました。トラスのチューブにより、2つの輪っかを組み合わせて、その上の部分をワイヤーを使い膜で覆う形を考えました。2つの輪っかをつなぐ中間性のある内部空間をギャラリーとして利用することを考えました。

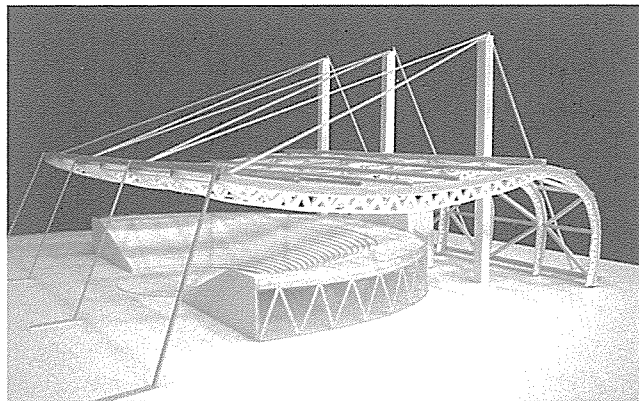
鈴木——僕は最初はすごく面白いなと期待していたんだけど、最終的にはもうひとつでしたね。ある時期でこれは駄目だと思ったら捨てることも覚えておいて下さい。

仙田——チューブの中で、移動可能な経路はあるの？

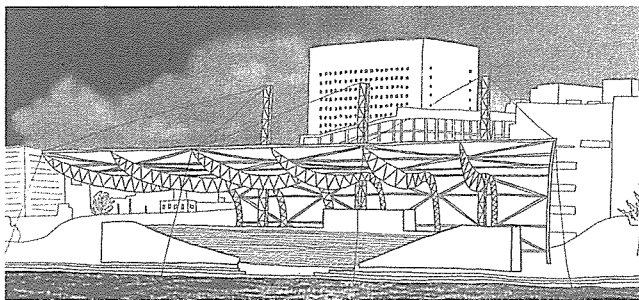
岡田——面が何個かつながっていて階段で行き来できるようになっています。

仙田——面とチューブをあわせてしまうとほとんど遊園地の世界になってしまう。ある意味では、博覧会的な施設とすれば、面白いかもしれない。彼の場合は、メビウスの輪を最初からのテーマとして大空間とどう結びつけるのかということで、挑戦していろいろと試行錯誤したということですが、プレゼンテーションとしてはまとまっていたんじゃないかなと思います。

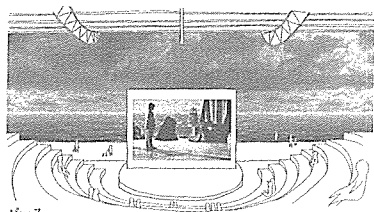
北川まどか KITAGAWA Madoka



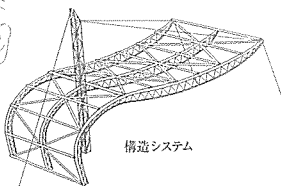
模型写真



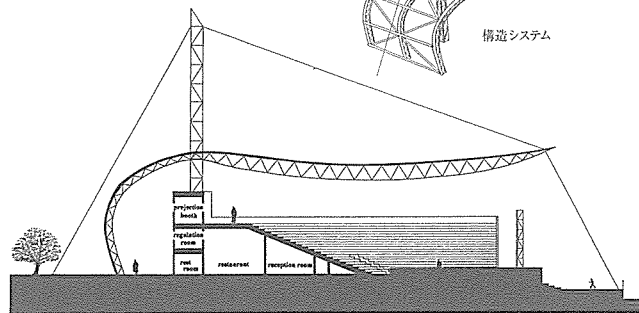
パース



パース



構造システム



断面図

北川—みなとみらいにはイベントを開催する場所があるのですが、どれも何か人の流れから外れている気がしたので、この場所に歩行者通路を取り込み、海に開けたイベントスペースを作りました。海に開けた感じを出すために流線型の屋根を吊りました。イベント開催時に、客席から海がしっかり見えるようにして、横浜という場所の特徴を生かそうと思いました。

鈴木—キャンピーに対しての吊る位置が違うのではないのでしょうか。コラムの断面も不自然です。コラムのコネクションのところですごく細くなってる。

金箱—ただ、このプロポーショナルを表現したかったんでしょ？ そのためには部材をどこで支えるか、どのようなディテールで支えるかということを考えなければいけない。

【総評】

鈴木—全体的にプレゼンテーションがもつてきたんじゃないかと思っています。僕がみなさんと同じくらいの時はもつともつプレゼンに力を入れていたと思うんですよね。図面に関しては影を入れたり、グラデーションを入れることで立体的に見える絵として表現していました。自分の思っていることを表現し、訴えることが大事です。プレゼンの腕を磨いてほしい。デザインは教わるものではないし教えられるものでもない。真剣に建築家になりたいんなら、常に経験したことがどうやったら建築に生かせるかを考えて生きて下さい。

金箱—今回の課題を通して3つのことを修得してほしかった。1つめは、大きなスパンに対するスケール感を身につけてもらいたかったということ。それと、平面で考えるのではなく、立体的に組むことによって工夫が生まれるということを知ってほしかった。3つめはこのような課題ではすぐ鉛直荷重について考えてしまうんですが、水平力についても常に心掛けてほしかった。次の課題でも建物の大小を問わず構造を意識しながら空間を作ることが大事です。だからといってただ構造がしっかりしていれば良いのではなく、作ろうとしている建築の空間にあった構造を常に心掛ける設計をしてもらいたいです。

戸尾—この課題は去年もみさせてもらったんだけど、3年生にとって難しい課題だと思います。それでも構造を理解して素直に表現する人、新しい構造に挑戦する人がいて、どちらも価値があるので今後にいかしてほしいと思います。実際設計する時は構造の先生と一緒に協力して仕事をするわけですが、建築家自身も構造を理解して空間を作っていくことが大切です。デザイナーとしても日頃から構造に関心を持ってもらいたいですね。

有田—私も大変難しい課題だったと思います。架構に振り回されず自分の作りたい空間を作ることが大切です。空間の組み立て方が、はたして正しかったのかどうかの確認を、ぜひセクションで行ってほしいと思います。最後に、もしデザインの方に進もうと思われるなら、その時々他をすべて忘れてデザインに打ち込んでいただきたいと思っています。

元結—スケールについて、ウルトラマンはあり得ないという話をよくします。あのプロポーショナルの足の細さで、あの体重を支えることはできません。圧縮力は部材が持っている強さよりも、幾何学的な形状、つまり細さで決まるところが大きいのです。去年にくらべて今年はオーソックスで「こんなあるか？」みたいなのがなかったのが、少し残念な印象を受けました。

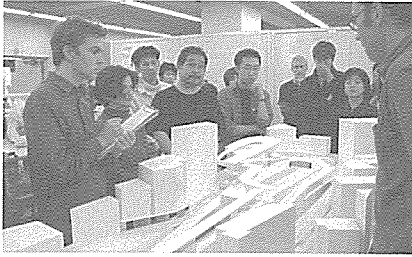
大野—元結先生がおっしゃった小さいスケールでは建つけど大きいスケールでは建たないというのは、本当かなと思った方もいるかと思いますが、その通りなんです。比重が一定でもスケールが変わると体積は3乗で効いてくるけど断面積は2乗でしか効いてきません。ですから1/10の大きさの象にはあの太さの足は必要無いわけです。スケールによる違いがあるということ最後に付け加えたいと思います。

ニュース

News

学生交流

1999年10月から12月にかけて、ロイヤル・メルボルン工科大学(Royal Melbourne Institute of Technology)の建設環境工学部建築学科の3・4年生10名が、1999年秋期学生交流プログラムによって来校した。滞在期間中、建築設計製図第四の第1・第2課題に参加し、本学の学生と合同で中間発表や最終講評会をおこない交流を深めた。建築設計製図第四の詳細は次号において報告する。



ロイヤル・メルボルン工科大学の学生を交えた建築設計製図第四の講評会の風景

大岡山建築賞

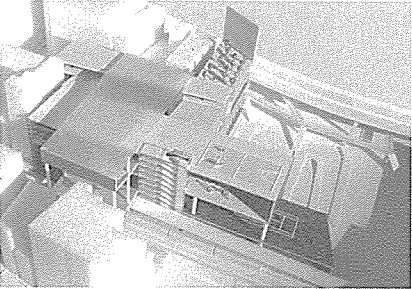
1999年度大岡山建築賞の受賞候補者が以下のとおり決定した。受賞作品の詳細については次号において報告する。

[大岡山建築賞]

- 松岡里衣子(B4)「澁谷文化中心」
- 遠藤康一(M2)「ポーラス・ビルディングシステム ヴォイドの配列による高容積・高密度地区の都市再開発」

[大岡山建築賞銀賞]

- 石原久一郎(B4)「サクラノモリノマンカインシタ」
- 岡村航太(B4)「タウン・スケープ 町田集合住宅プロジェクト」



澁谷文化中心(松岡里衣子)模型写真

投稿作品紹介

Contributions

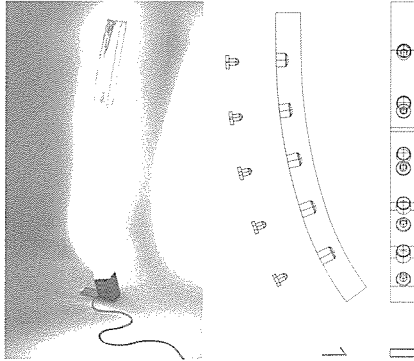
ここでは、コンペの応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を募り、紹介しております。なお、投稿者の所属は本紙の発行日現在のものであります。

Uff

"STURM und PLASTIC" competition
[First Prize]

Giuliana Succo [M2]+ Sergio Viotti [MEIHO Corporation]+ Akira Metoki [MTK]

イタリアのディスプレイメーカー"La Rosa Mobili"により、新開発されたプラスチック素材を使った提案のコンペが行われた。その素材は、透明で気泡を含み、ゼリーのように柔らかくそうに見える。我々はそのような素材のイメージを活かしたフロアー・ライトをデザインした。このライトは緩やかにカーブした形状をもち、不安定なその様子は、疲れて"Uff...!"(イタリア語)と息つく人のイメージである。このライトはコンペで1等となり、現在サイズの異なる3種類のヴァージョンが生産されている。



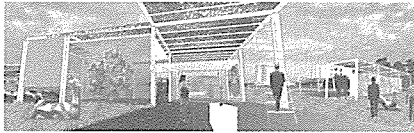
テンポラリー・花畑 Temporary Flower Garden

東京建築士会 第34回建築設計競技
「テンポラリー・ミュージアム・パーク」[銅賞]

遠藤康一[村田靖夫建築研究室]+

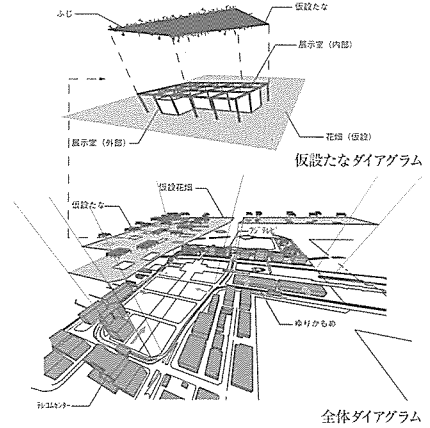
北山修[坂倉建築研究所]+野村陽子[修士2年]

ENDO Koichi (Yasuo Murata Architect & Associates),
KITAYAMA Shu (Sakakura Associates Architects and Engineers),
NOMURA Yoko (M2)



お台場・青海地区には、海を最外周としてゆりかもめ・建物のヴォリュームが囲む同心円状の構成の中心に、都市博の予定地であった約50haの広

大な空地が存在する。この計画では、ミュージアム・パークとしてゆりかもめに対して眺望を提供する「花畑」と、ギャラリー・工房・カフェ・東屋・パーキングなどの機能を内包し、花畑をヴォリューム化した「たな」という2重の仮設物を計画することで、この広大なヴォイドに機能を与えた。



多孔質な住宅地 Re/configuration of Suburban Voids

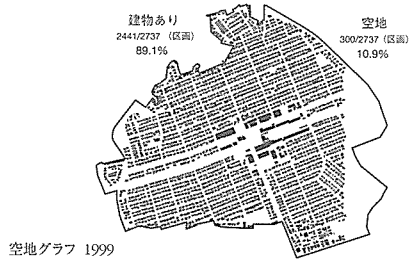
建築学生設大賞'99

「多孔質の家」[奨励賞]

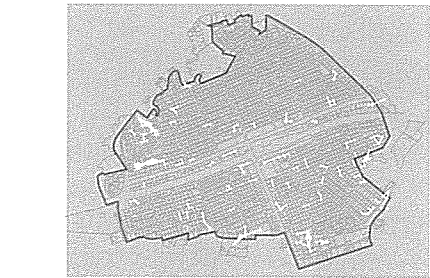
安森亮雄[博士課程]

YASUMORI Akio (doctoral candidate)

東京近郊のある住宅地における虫食い状の空地に着目し、その配列を組み替えることにより、グリッド状の区画における建築と空地の配列形式のオルタナティブを提案した。



空地グラフ 1999



空地接続マップ(空地星座図) 1999



空地スケッチ・タウン

うずまき Uzumaki

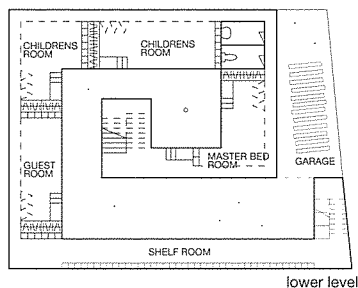
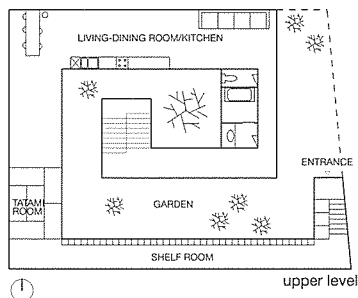
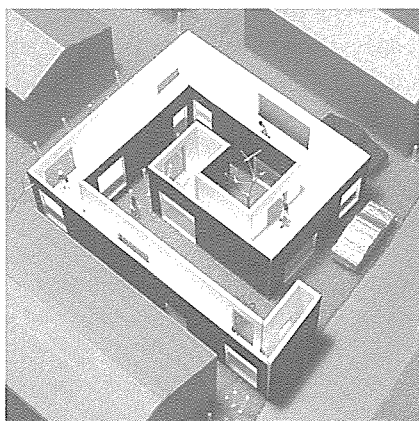
第11回タキロン・国際デザインコンペティション'99
「リンクのない家」[3等]

荒井拓州[修士1年]+岡村航太[修士1年]

ARAI Takushu (M1), OKAMURA Kouta (M1)

一般的な住宅地では、建物は敷地内の空地に囲まれ、ガレージや庭、樹木、低木、室外機、自転車置き場などの用途が配置されている。しかし、それらの用途は方位や接道の仕方によって決定されることが多く、空地と建物によって形式化された「敷地のリンク」がつくりだされている。

これに対して、この「うずまき」は、敷地の内と外に空地をもつ。このことにより、建物と空地によりつくられる「敷地のリンク」は消え、隣接する敷地へと広がる新たな全体を獲得している。



"House in Places"

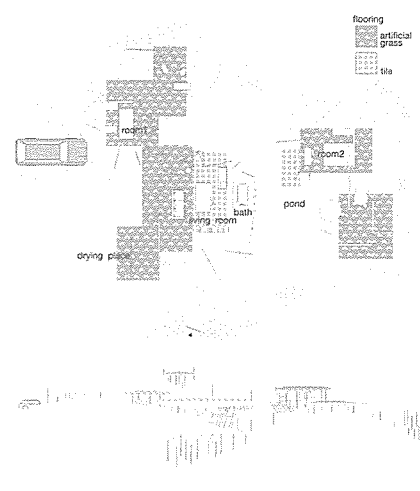
第11回タキロン・国際デザインコンペティション'99
「リンクのない家」[入選]

丸山美紀[みかんくみ]

MARUYAMA Miki (Mikan)

建築としての家の構築性は、家の全体像を強固なものとし、その形式は、家族のあり方と密接な関係を持っている。そのような構築物としての家を分解すると、家はもはや閉鎖系の形式を持つことができない。この家は、柱・壁・床・屋根を土

地にばらまくように配置し、それらの連鎖的な関係で場所がつけられる。また、現在の住宅地のように細切れの土地に家をはめ込んでいくのではなく、地形化された場所を必要な分だけ選び、家をつくっていくことができる。



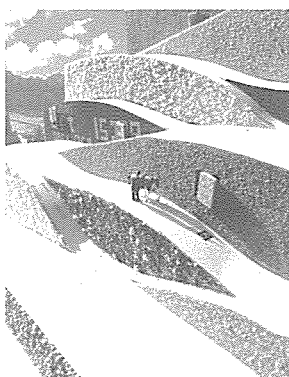
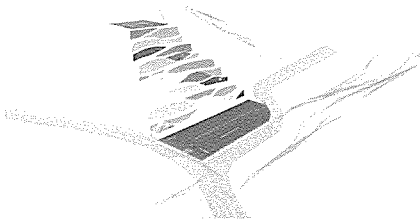
タナダパーク Vertical TANADA Park

越後妻有アートトリエンナーレ2000
大地の芸術祭 [入選]

久野靖広[博士課程]+黒田潤三[美術家・建築家]

KUNO Yasuhiro (doctoral candidate), KURODA Junzo (Artist, Architect)

新潟県松之山町は日本でも有数の棚田が広がる地域であり、古い歴史をもつ温泉街入口に位置する駐車場とそれに隣接した法面の総合的な修景プランが求められた。本計画では、法面の段切りを緩やかなスロープや階段で形成し、法面にはバス停や公衆トイレ、サインボードといったいくつかのファンクション、そして花や緑、石の壁といったものがひとつずつ組み込まれており、垂直に起こした棚田のように全体が構成されている。人々はスロープを歩いて散策することができ、第二の棚田を体感しながら、越後妻有の自然に内包される。



Roppongi Infra Museum Catalogue

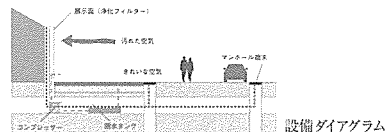
第13回建築環境デザインコンペティション
「新世代の美術館」応募作品 [佳作]

東野晋二[修士2年]+高橋寛[修士2年]

HIGASHINO Shinji (M2), TAKAHASHI Hiroshi (M2)

都心部では建て替えが激しく、そのことで街のあちこちは空地が出現し、そこ隣接する建物は本来みせることのない裏の壁面を露わにしている。

我々の提案は、都市にむき出しになっている壁面と同じ形の展示壁を建てることで、新たに街のファサードを作るということである。展示空間は雨水を利用した空気清浄機となり、マンホールは順路サインとしてネットワーク化され街にも開放し、美術館は都市の新たなインフラとなる。



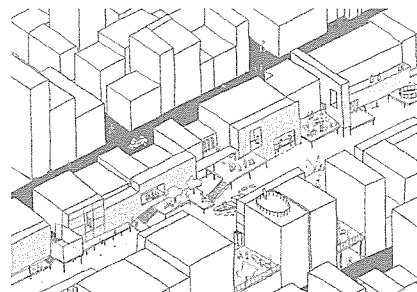
カンダリバーネット Kanda River Net

平成11年度日本建築士会連合会賞設計競技
「マイタウンカルテ」応募作品 [奨励賞受賞]

東野晋二[修士2年]+高橋寛[修士2年]

HIGASHINO Shinji (M2), TAKAHASHI Hiroshi (M2)

この計画では、街全体に神田川からの水を引き込む水路網を作り、神田川に沿った一帯を親水性を高めた街とする。この水路は、災害時の水資源となるほか、空気をピオトープの場として再生させる。また、神田川の水運を日常交通網とすることで、道路だけではなく川からもアプローチするようにし、都市の裏を作らない。神田川と街の境には、水を利用した住宅と商業による複合施設をつくり、街の核とする。



書評

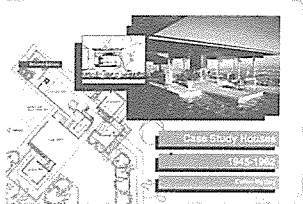
Book review

「ケース・スタディー・ハウス」 時代の変わり目における理想住宅

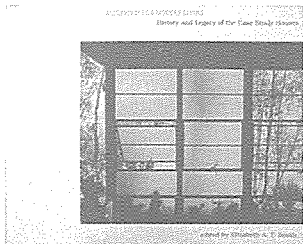
"The Case Study House"
The Ideal House at the turning of the times

那須聖[助手]

NASU Satoshi (Assistant)



"Case Study Houses 1945-1962" (写真は1977年版)



"BLUEPRINTS FOR MODERN LIVING"

ケース・スタディー・ハウス

「新しい世界に我々自身を適合させ古い世界に逆戻りすることを避けるためには、我々の暮らしと思考の一番大きな部分を形成している環境創造において、現代思想を積極的に理解し、受け入れることが必要だと悟るであろう。」*

発行人ジョン・エンテンザが宣言しているように、ケース・スタディー・ハウス・プログラム(以下、C.S.H.プログラム)の指向するところは過去と決別した新たな住環境の創出にある。

雑誌アーツ&アーキテクチュアにおいて1945年から1966年にかけて行われたC.S.H.プログラムは、大衆住宅のプロトタイプを提案したものである。不景気と大戦の終結を受け、住宅不足や家族構成の変化に対する建築家側からの提案として、竣工後のある期間、一般に公開されることが条件であり、一般市民への啓蒙活動と同時に、建設に関わった企業へ宣伝の場を提供するものであった。

不況、大戦という長いストレス下におかれた建築界

がそこから解放されたとき、そこにあったのは建築家のユートピアか、それとも「新たな」現実か。エッサー・マッコイによる著作「Case Study Houses 1945-1962」と、ロサンゼルス現代美術館(MOCA)における展覧会のパンフレット「Blueprints for Modern Living」を紹介しつつ、ケース・スタディー・ハウス・プログラムにおける理想とその限界を明らかにしようと思う。

Case Study Houses 1945-1962

Esther McCoy, 1962

本書はC.S.H.プログラムが継続されていた1962年に刊行されたものである(1977年に再版)。

マッコイは計画を3つの期間に分けている。まず、1945年から1949年のイームズとサーリネンによる2案の完成までの第一期。これに続く第二期は、鉄骨造が主体となり機械と密接な関係を持った時期とし、工業化住宅のプロトタイプとしての意味合いを強めていったとしている。転換点としてのイームズとサーリネンによる作品は、既成の部材のみによってつくられた作品として当初の理想を具現化した最初の例であり、ここまでの期間からは理想の実現から多様な展開へと至る成長の過程を読みとることができる。そして1960年以降、C.S.H.プログラムは内容を変化させていく。一戸の住宅からより広範囲の環境創造へとテーマが移行する、と著者が書いているように、集合住宅や戸建ての集合による計画が現れ始め、コミュニティーの創造を考慮し始める。反面、規模の拡大、ガラスの多用による過度の開放性が現れ始める。

本書では、過去の住宅にはさほどふれず、プログラムの作品紹介が坦々となされている。逆に、その作品の多様性が、変容する社会状況とそれに対応して新たな地平を築こうとした建築家たちの夢が時代とともに変化していく様を露わにしている。

BLUEPRINTS FOR MODERN LIVING

History and Legacy of the Case Study Houses
edited by Elizabeth A.T. Smith, 1989

MOCAにおける展覧会はケース・スタディー・ハウスを中心に当時のアメリカにおける住宅建築の潮流とその後の建築界に与えた影響を紹介したものである。本書はこの回顧展に際して刊行され、作品の紹介とともに複数の著者による論文が掲載されている。

本書の中で、トーマス・ハインズはC.S.H.プログラム以前に活躍した建築家を取り上げ、ノイトラやソリアーノといった20、30年代の建築家の活躍によってその礎

が築かれたことを示している。本書にはないが象徴的なのはノイトラである。かつてロベル邸で工業化住宅の先駆をつけ自身も#20(下写真中央)を設計しているが、ケース・スタディー・ハウス以外の彼の住宅作品は、後年、鉄骨や工業材料から離れ、木造のよりシンプルな方向へと変化していく。それは、ガラスと鉄骨のパヴィリオンとなりつつあったケース・スタディー・ハウスへの反動ともとれる。

また、レイナー・バンハムは当時アーツ&アーキテクチュアがユネスコのパンフレットと並ぶ世界的な発行部数を誇ったとし、ハイテック・スタイルへと至る変遷を示している。ここで、ケース・スタディー・ハウスがプロトタイプとして機能したのは住宅としてではなく、工業材料や技術を反映した建築の様式にあるといえよう。

ドロレス・ハイデンは、「建築家の夢、建設者の誇り、板挟みの住人」と題し、その中で、模範的な住宅は、子供達のケア、学校、公園、交通といったものと密接な関係があり、建物自体は生活環境の即物的な一面にすぎないとしている。さらに、建物自体をスタイルの象徴とし、C.S.H.プログラムにおけるコミュニティーへの配慮の欠如を指摘している。また、この種の鉄骨やガラスを多用した近代住宅に対して銀行が融資を渋っていたという事実を述べている。そこには一雑誌におけるプログラムの限界と、それに対する当時の保守的な社会的枠組みがはっきりと浮かび上がる。

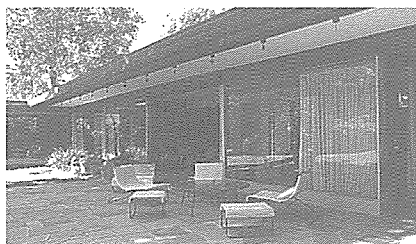
ケース・スタディー・ハウス・プログラムには新しい住環境の創造への可能性と限界があった。ここで展開された、様々な業種の混合による建設、既成部材の組み合わせというコンセプトは、現在の建築界の仕組みそのものでもある。また、イームズ邸を例に挙げるまでもなく個々の住宅が、その後の建築界で近代住宅の展開に果たした役割は大きい。

かつて、18世紀のアメリカにおけるスタイルの流行や確実な設計に設計事例集「パターンブック」の果たした役割は大きい。新たな住空間の創造において、ケース・スタディー・ハウスは近代住宅のパターンブックなのかもしれない。それは、スタイルの流行や、安価で確実な建物の提供に大きな成果をあげるとともに、大衆に近代住宅を啓蒙する役目を果たした。しかし、工業技術のパヴィリオン化したその姿、また、単体のプロトタイプであるが故に、近隣の関係も含めた住環境全体の創造には限界が生じたといえよう。

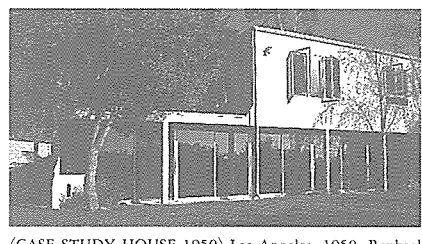
※ Entenza, John: "The Case Study House Program", Arts & Architecture vol.62, 1945.1より



〈CASE STUDY HOUSE #22〉 Los Angeles, 1959-60,
Pierre Koenig



〈CASE STUDY HOUSE #20〉 Los Angeles, 1947-48,
Richard Neutra



〈CASE STUDY HOUSE #15〉 Los Angeles, 1950, Raphael Soriano / 増築された2階部分が、オリジナルにおけるプライバシーの欠如を物語る。

世界の建築教育

Architectural education in the world

ミラノ工科大学に留学して

My experience at the Milan Polytechnic

齊藤哲也 [博士課程]

SAITO Tetsuya (Doctoral candidate)

[ミラノ工科大学建築学科]

ミラノ工科大学は1863年に創立され、建築ではGio' Ponti, Aldo Rossi, Renzo Pianoといった、数多くの建築家を世に送り出してきた大学です。主要な校舎は、ミラノ市の西部(Citta' Studi)に位置し、Vittoriano Viganoの設計による校舎(Fig.1)が、建築学部を中心となっています。近年は、Bovisaと呼ばれる北部の工業地帯に点在する旧工場を改修し、新キャンパスが設けられています。

大学全体でおよそ35,000人の学生が在籍しており、architecture, industrial design, town planningを合わせた建築学部でも約15,000人の学生が在籍するマンモス校です。そのためか、各設計課題から卒業設計に至るまで、多くの学生が2~3人のグループで設計課題に取りかかります。また、研究室といった明確な単位のみならず、各学生が、それぞれの教授との面接等を通して、一対一の関係で建築を学んでいる印象を受けました。私がお世話になったFilippo Tarraglia教授は、週のほとんどは中心部にある自分の設計事務所です。週に数回、大学に足を運びます。学生達は、その定期的な面接の日程に対し、事前に秘書を通して先着順で面接の予約を入れます。当日、学年も課題も異なる学生達が代わる代わるアドバイスを受けますが、30分かかるグループもあれば、5分で終わるグループもあり、内容次第、口次第です。そして卒業までには約30単位を履修しますが、各生徒の自主管理で、すべての時間割、教授との面接等をやりくりしなければならず、これは大変な労力を要します。

こうした完全な自主管理に任された環境は、好意的に解釈すれば、一定の学習方法、学習の場を持たないことで、特定の大学や研究室、同学年の特色、傾向といった枠に収まることなく、各個人が感ずるままに建築を学ぶことができるといえます。個人の感性を最も尊いものとするイタリア社会の構図が、大学教育にも色濃く反映されている気がします。

[歴史的建造物の改修]

私がミラノ留学で選んだ主なテーマは、歴史的建築物の改修です。18世紀後半の歴史的認識の高まりから、歴史的建造物の保存、改修の理論が生まれ、200年あまりを経た今日では、その保存改修の理論や方法は、幅広い解釈が行われるようになりました。現在では、イタリアの殆どすべての設計事務所が、改修の仕事に携わり、設計活

動の大半を占めるほどです。イタリア語では、restauro(回復)をはじめ、ristrutturazione(再構築)、riuso(転用)等、既存建築に建築的に手を加える行為を表現する言葉が、ざっと挙げても二桁以上は存在し、その言葉の数だけ、改修に対する多様なアプローチがあるといえます。

歴史的建造物の保存や改修というと、物理的な条件や制約がまず頭に浮かび、建築活動としては消極的な印象を受けがちです。しかし本来の改修の意義は、これまでにその地域に積層された歴史と育まれてきた文化の証となるものを保持し、そこに生活する人々のアイデンティティを支えるものと言えます。そのため、各個人の基盤となる精神的支えを存続させると共に、現代的な生活環境や感覚的刺激を満たすことも必要とされるため、改修では今の時代の断面を新たに刻み込むことも重要とされます。そのため、その改修方法は想像以上に積極的であり、大胆です。特に1950年代のスカルパやBBPR、フランコ・アルビーニらの改修には、それまでの保存修復主体の改修理念から脱却して、古い部分と新しい部分の差異、相違をより強調していく姿勢が打ち出されています。そうした活動を受けて、近年では歴史的要素としての価値を有する部分に対して、新しく手を加える部分は、その解釈次第で、形態、素材、色、構成等において、既存部分に準じた表現であったり、対極の表現であったり、事例によっても建築家によっても多様な表現がみられるようになってきました。18世紀初頭の宮殿を美術館に改修したCastello di Rivoli(Fig.2, 3)を例に挙げれば、当時の建築表現に対し、その断面をガラスを用いて、そのままファサードに見立て直したり、内部に売場を備えた5層吹き抜けの吊り階段を組み込むなど、その構成の捉え方や素材感、軽量感をとつても、巧みな対比関係が見て取れます。

また最近では、Renzo Pianoによるリンゴット自動車工場の改修をはじめ、ミラノのナビーリオ運河沿いにあるRichard Ginori工場の改修など、歴史的建造物としては比較的歴史の浅い工場建築に対しても、積極的に改修が行われるようになってきました。

長年見慣れた古い要素と、それを受けて加えられる新しい要素との対話には、微妙な緊張関係の中に、その場固有の精神的な深みと刺激があります。それは、精神的基盤を支える要素の中で、新たに生まれる要素が引き立てられ、まるで“生”の感覚を喚起させられるような心境ともいえるでしょう。

[イタリアに生活して]

大学で学ぶのと同じくらい、イタリアの生活から学ぶことも多かったと思います。イタリアでは、形式や規則をあまり重要とせず、その場の雰囲気決めてしまう傾向があります。役所に書類一つ提出するにも、こうすれば良いということはなく、頭

を抱えてしまうこともよくありました。しかし、それは同時に生活全体が非常に自由で開放されたものであることの側面でもあります。BARでお金を払うタイミングも各人の好き好きであれば、大学の履修の時間割も好き好きです。新しいアイデアや関係を自由に受け入れることのできる環境がそこにはあります。そして、その裏には、宗教的なものや、家族中心主義的なものなど、どの世代にも一貫した守るべきものが確固としてあることも確かです。

守るものと自由に変化するものの関係は、先程触れた改修とも共通しているかもしれませんが、私にとってのイタリアは、こうした日本とは異なる両極的な二面性をもった世界として映りました。

留学先としてのイタリアは、建築単体はもとより、建築と人との関係に、日本とは異なる側面を見せてくれる確かな場所です。2年間の滞在を通して、広い意味での建築に対する考え方の幅を広げることができたと思います。



fig.1 ミラノ工科大学/設計: Vittoriano Vigano

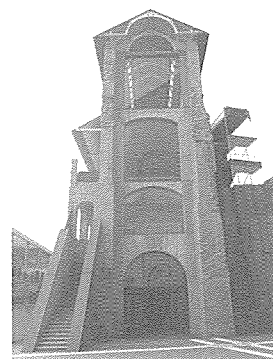


fig.2 Castello di Rivoli. 設計: Andrea Bruno



fig.3 Castello di Rivoliの内観

OB卒業設計再見

Review of alumni's diploma projects

戦時色の反映と建築形態の3つのタイプ

1939年(昭和14年)–1943年(昭和18年)

Reaction to the war: three types of building form
1939–1943

山崎綱介(助手)

YAMAZAKI Taisuke (Assistant)

第15号、17号に続く今回の第3弾では、第2次世界大戦前の5年間を取り上げる。作品数は、昭和14年度から18年度までの5年間で、91作品(年度順に17、22、15、16、21)である。

建築種類別にみると、多い順に集合住宅14件、会館建築(文化会館、学生会館、放送会館など)10件、空港8件、駅舎5件、美術館5件、療養所4件、倶楽部建築4件、リゾートホテル4件となる。敷地は、市街地(交差点付近・公園内など)を仮定したものが主であるが、「宇奈月温泉ホテル」「芦ノ湖畔に建つホテル」などのリゾートホテルに代表されるように、自然景観を舞台にした作品が14件みられた。建物のデザインは市街地・自然の区別なく、ほとんどが近代主義的デザインである(Fig.1)。

この時代の特徴の1つに、戦時色の反映が挙げられる。戦時色を強く感じさせる作品は全部で25件あり、それらは「北支青年会館」「台湾航空港」など植民地に敷地を求めたものが8件、「支那事変記念館」「兵隊会館」「奉誠会館」など記念

的建築が7件、その他には「多摩川防空住居群計画案」「飛行艇制作工場」「滑空訓練所」「国民錬成体育館」などが合計10件あった。昭和18年度にはこうした作品の数が最も多く見られ(8/21作品)、そのうちの「熱地兵站ノ基地ニ建ツ兵隊ノ家」(切妻・Fig.2)、「公会堂試案」(入母屋)、「労務者ノ一厚生施設」(寄棟・Fig.3)などには、勾配屋根を架けた意匠が用いられた。

またこの時代の作品は、その形態上の特徴から大きく3つのタイプに分けることができそうである。1つめは、空港、駅舎など、できるだけ横に細長い形態を持つとするタイプである。空港では滑走路に接する面に、駅では線路とホームに接する面に長軸が取られ、建物を低層とすることで立面の水平感がより強調されている(Fig.4)。2つめは、集合住宅、病院、療養所、ホテルなど、多くの個室を持つ建物で、ここでは単位空間を縦横に反復して幅の狭い中層棟をつくり、それをつなげたり並べたりして全体を構成するタイプである(Fig.5)。集合住宅を主とした都市計画はこれを都市的に展開したものといえる。3つめは、講堂などの大きなヴォリュームと他の部分との対比を表現するタイプである。対比の方法は大きく分けて2種類あり、一つは、建物全体をシンメトリーとし、その中央軸線上に講堂を配してその大きさの対比を強調したもので、これには劇場(Fig.6)や音楽堂のように、それ自体が主たる目的であるものが多い。もう一つは、講堂を独立したヴォリュームとして扱い、別棟との外観形態の違いを対比したもの(Fig.7)で、

これにはいわゆる複合建築が多く、建築種類別では文化会館や学生会館から美術館、倶楽部建築、放送会館、新聞社、図書館、資料館、牧場建築に至るまで様々である。講堂以外にも体育館を用いて対比を表現した作品が4件見られた。

この時代のこうした傾向を総合的に表現している作品として、吉田貞雄の「(国民ノ庭)国民会議院・中央文化原設計案」(昭和18年度)を挙げることができる。この作品は、建築を通して文化を政治に反映させようとする計画案である。そこでは「政治の要求する文化とは活動する文化である」と、反映すべき文化が現代的・普遍的であることを主張し、「大東亜様式論」が否定されている。そして「文化の政治性は、文化が政治の要求に即応できる態勢を作り上げることをその第一段階とする」ために、「国民の気運を代表」するものとして「国民の森」の施設を提唱している。具体的には小石川後樂園周辺の広大な敷地を対象に、議事堂、忠霊塔、学生会館、研究所、図書館、国民広場など20の施設あるいは広場が配置されている(Fig.8)。それぞれの建物には近代主義的なデザインが用いられたと考えられるが、ここでは学生会館や宿舎には単位空間を反復する形態が適用され、一方、議事堂にはヴォリュームを対比させる複合建築の形態が適用されるなど、先述の分類に対応した形態が用いられている。そして広大な敷地の中でこうした形態上の違いを対比させることで、全体としてのまとまりを作り上げているように思われる。

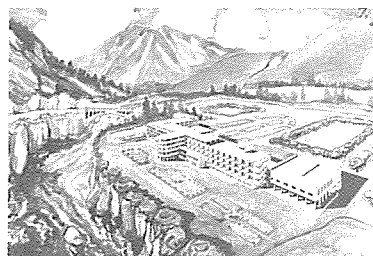


Fig.1.「宇奈月温泉ホテル」(昭和15年度 深谷太郎)

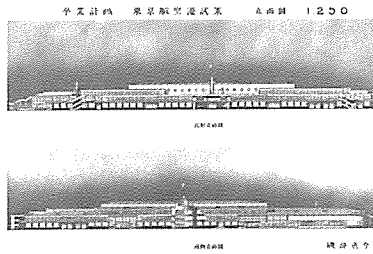


Fig.4.「東京航空港試案」(昭和15年度 磯部眞介)

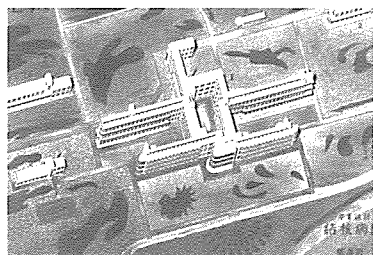


Fig.5.「結核病院」(昭和15年度 川崎海造)

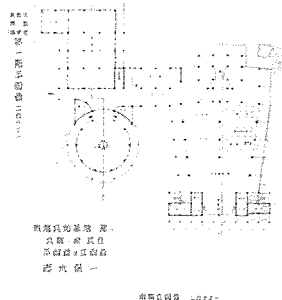


Fig.2.「熱地兵站ノ基地ニ建ツ兵隊ノ家」(昭和18年度 志水保一)

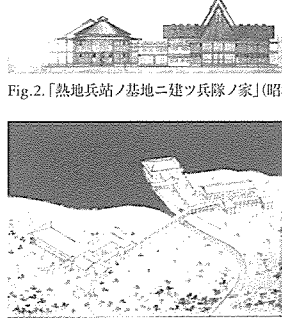


Fig.3.「労務者ノ一厚生施設」(昭和18年度 柳英男)

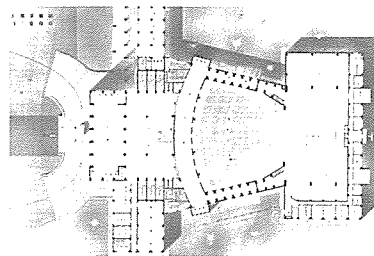


Fig.6.「劇場」(昭和14年度 阿部康博)

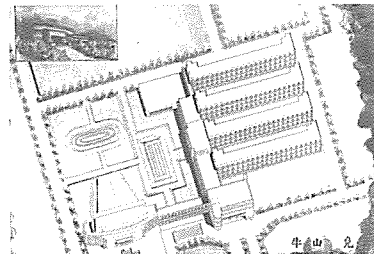


Fig.7.「兵隊会館」(昭和15年度 牛山亮)

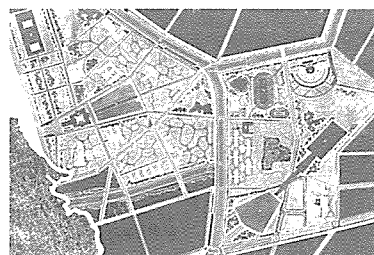


Fig.8.「(国民ノ庭)国民会議院」配置図(昭和18年度 吉田貞雄)

TIT建築設計教育研究会会則

[第1条]名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

[第2条]目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

[第3条]事業内容

本会は次の事業を行う。

- ①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

[第4条]会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

[第5条]会費

本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)

[第6条]役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

[第7条]総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

[第8条]会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

[第9条]存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。(この項削除=第5回総会にて承認)

[第10条]会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。(以上)

〈細則〉

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

[第1条]役員

本会の役員は構成は下記による。

運営委員9名(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

[第2条]総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

(以上)

1998年度役員(99.12.31現在)

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事

顧問:林昌二(1953卒)(株)旧建設最高顧問

運営委員長:戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アークヴィジョン代表取締役

副委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役所長

監査役:藤江澄夫(1960卒)清水建設(株)取締役専務執行役員プロポーザル本部長

運営委員:岡部富雄(1959卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長

運営委員:仙田満(1964卒)東京工業大学教授

運営委員:服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店取締役

運営委員:坂本一成(1966卒)東京工業大学教授

運営委員:八木幸二(1969卒)東京工業大学教授

1999年度法人会員(99.12.31現在)

(社名/本会への代表)

大林組/國富勲、鹿島建設/中島隆、構造計画研究所/富野壽、清水建設/藤江澄夫、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、レーモンド設計事務所/森山興真、IAO竹田設計/竹田秀道、環境デザイン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建築研究所アークヴィジョン/戸尾任宏、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、アモ設計事務所/篠崎好明、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、金箱構造設計事務所/金箱温春、武田光史建築設計事務所/武田光史、伊達計画文化研究所/伊達美穂、山下和正建築研究所/山下和正、山下設計/井上雄治、渡辺組/渡辺達夫

1999年度個人会員(99.03.17現在)

(氏名(卒年))

田口武一(S10)/東久世秀禱(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/石野治(S23)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/内藤昌(S30)/城間勇吉(S31)/洪田実(S32)/中神弘(S32)/松下謹三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/星野利一(S35)/松野公一(S35)/後藤宣夫(S36)/佐々木雄二(S36)/鈴木歌治郎(S37)/最上達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田桂吉

(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/岩沢二郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/鈴木清友(S41)/大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/荻谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/尹原基(S48)/有里公德(S49)/高田典夫(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S50)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮本宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康憲(S52)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/飯利昌人(S53)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/帽田秀樹(S59)/大佛俊泰(S60)/所司護(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/今井賢治(H1)/栗原正明(H1)/鹿野秀馬(H2)/木島千嘉(H3M)/櫻井康雄(H4)/菅原正則(H5M)/保住秀樹(H5)/藤岡務(H6M)/村田淳(H7)/七田裕(H8M)/吉田佳代(H9)/井上寿(現職)/以上151名

1999年度大岡山建築賞

1999年度大岡山建築賞受賞者は、以下のとおり決定し、6月12日、第10回総会にて授賞式が行われる。

[大岡山建築賞]

●松岡里衣子(B4):「澁谷文化センター」

●遠藤康一(M2):「ポラス・ビルディング・システムヴォイドの配列による高容積・高密度地区の都市再開発」

[大岡山建築賞銀賞]

●石原久一郎(B4):「サクラノモリノマンカイノシタ」

●岡村航太(B4):「タウン・スケープ 町田集合住宅プロジェクト」

編集：東京工業大学工学部建築学科ka編集委員会

編集委員長=坂本一成

委員=八木幸二/三上貴正/五十嵐規矩夫/塚本由晴[幹事]/寺内美紀子/中井邦夫/足立真

学生編集委員=長岡大樹/吉村英孝/網川いずみ/高橋寛/東野晋二/稲毛誠

編集協力：デザイン=秋山伸+久世健/翻訳=デイヴィッド・スチュアート

表紙：私の家(清家清自郎)外観[©塚本由晴]

発行：TIT建築設計教育研究会[2000年6月発行]

定価：800円

ka019

Spring/Summer, 2000



「私の家」を南側の庭より望む。

建物は1954年に完成し、その後、書庫、物置としてコンテナが上部に設置されている。
コンテナの左側に「続 私の家」からのびるブリッジが見える。

